

2025 年度  
チャペル講話集



関西学院大学社会学部

## 2025年度 社会学部チャペルアワー 月ごとのテーマ

### 春学期

- 4月 関西学院のこころ
- 5月 自分らしさとは
- 6月 しんどくなった時
- 7月 私の好きな聖書の言葉

### 秋学期

- 10月 平和を造るために
- 11月 大切な一冊
- 12月 クリスマスを前にして
- 1月 新年を迎えて



## 2025年度 チャペル講話集目次

I. 自分らしさとは	
「〇〇らしさ」への疑問 .....	中谷 文美… 6
「知られたい私」を選びとる .....	鈴木 謙介… 9
II. しんどくなった時	
「安心して悲しむ」ということ—喪失の先に見出した光 .....	金菱 清… 14
自分の置かれた世界とそこから逃げたいと思うこと .....	高原 基彰… 18
しんどくなったときに、思い出してほしいこと .....	長松奈美江… 22
ラマダンとストライキの体験 .....	鳥羽 美鈴… 25
III. 平和を造るために	
反戦運動でつながるクィア・フェミニズム .....	武内今日子… 30
IV. 大切な一冊	
かけがえのない出会い .....	打樋 啓史… 36
閉塞感の向こうに .....	高松 里江… 41
人とわかり会えるための論理 .....	清水 裕士… 45
誰かと読むという経験 .....	村田 泰子… 49
踏まれたら立ち上がらない .....	立石 裕二… 52
異なる世界を共に生きる —『ソロモンの指輪』に学ぶ他者理解— .....	森 久美子… 55
V. クリスマスを前にして	
関西学院のクリスマス—原田の森時代の資料から .....	赤江 達也… 60
メリー・クリスマス .....	寺沢 拓敬… 65
How to demonstrate kindness in this special season? .....	Vivian Bussinguer-Khavari… 67

VI. 新年を迎えて

新年の雪景色 ..... Timothy O. Benedict... 72

VII. 学年度末にあたって

余白の重要性

——学年度末にあたって—— ..... 島村 恭則... 76

# I. 自分らしさとは

2025. 5. 13 (火)

## 「〇〇らしさ」への疑問

中 谷 文 美

「自分らしさ」に引っかかるのはなぜ？

私の専門は文化人類学ですが、この学問の守備範囲は非常に広く、私はこれまで「働くこととジェンダー」を軸に研究を進めてきました。主なフィールドはバリ島をはじめとするインドネシアとオランダで、近年は共同調査でさまざまな国に行く機会も増えていきます。

さて、今月のテーマは「自分らしさと何？」です。

実は私は、この「自分らしさ」という言葉があまり好きではありません。もちろん悪い意味の言葉ではないと分かっているのですが、どこか抵抗を感じてしまう。そこで今回は、なぜ私がこの言葉に引っかかりを覚えるのか、改めて考えてみることにしました。

まず私にとっての引っかかりは、「らしさ」の部分です。

「〇〇らしい」という表現から皆さんが思い浮かべるのは何でしょうか。私の場合、「女らしい」「男らしい」「学生らしい」といった言葉が浮かびます。それらには共通して、先に“あるべき姿”のイメージが存在し、それに沿った見かけや振る舞いを期待するニュアンスがあります。そのため「〇〇らしい」という言葉を聞くと、特定の形の箱の

中に押し込められるような感覚がしてしまうのです。

私が皆さんと同じ学生だった頃は、まさに「らしさ」全開の時代でした。「女らしくない女は存在価値がない」といった言葉が日常的に向けられ、服装のみならず、お酒の席でどう振る舞うかといった些細な行動にまで「女らしさ」「男らしさ」が求められる。その型から外れる人は必ず何か言われる、そんな状況がありました。

私の「らしさ」への反発は、おそらくその時期に芽生えたのだと思います。その意味では、「日本人らしさ」という言葉もあまり使いたくありません。ただ日本で暮らしている限り、自分が日本人らしいかどうかを意識する場面自体があまりないのも事実です。

「らしさ」と結びつく「見かけ」

イギリスの大学院に進学したばかりの頃のことです。キャンパスのベンチでひとり本を読んでいた私を、日本人留学生たちが遠くから見て「あの人、絶対日本人じゃないよね」と言っていた、と後に本人から聞きました。その判断の理由は、私が当時かけていた大きめの赤いフレームの眼鏡だったそうです。「あの眼鏡はシンガポールの人っぽい」と思

ったのだとか。

一方でイギリス人の友人からは、「初めて会った頃は隙のないおとなしめの服装だったので、とても日本人らしく見えた。でも最近では服装が変わって、ぱっと見では日本人と分からなくなった」と言われたこともありました。

そう、「らしさ」というのは、実は結構な割合で「見かけ」と結びついています。しかも、その見かけに基づく判断というのは、「〇〇にふさわしい」「〇〇らしい見かけとはどういうものか」という、一定の先入観に基づいて下されていることになります。

### 「関西人らしさ」に同化する関西人？

とはいえ、見かけの問題に干渉されない「らしさ」というものもあります。

たとえば「関西人らしい」って、どういうことでしょうか。私の知人に東北大学で文化人類学を教えている関西出身の方がいます。彼は高校卒業後に仙台へ進学したのですが、当時は関西から東北の大学へ進学する学生が珍しかったのか、会う人ごとに「関西人ってこうだよ」と言われ続けたといいます。「関西人ておもしろいことを言うよね」とか、「いつも値切るよね」などなど。

その人は、関西に住んでいる時には自分が関西人かどうか、自分がしゃべる言葉が関西弁かどうかさえ意識したことがなかったにもかかわらず、仙台で暮らすうちに、だんだん周囲から期待される関西人らしい振る舞いにどんどん自分を合わせていき、関西人に「なっていた」という過程を学術的に分析しています。その内容は学会誌『文化人類学』に「東北の関西人」というタイトルで掲載され

ていますので、興味があればぜひ読んでみてください。

### 「ありのまま」と“Let It Go”

では「自分らしさ」とは何でしょうか。周囲が勝手に押しつける期待に従うのではなく、自分をありのままに表現すること。それが自分らしさ、私らしさだとすれば、たしかに良いことのように思えます。ただ、この「ありのまま」にも落とし穴がある気がしています。

「ありのまま」って覚えていますか。2010年に公開されたディズニー映画『アナと雪の女王』の主題歌で、当時皆さんは小学生だったと思うんですけど、きっとご存知だと思います。その「ありのまま」の歌詞は、映画そのものの魅力と相まってとても人気を博しました。

ご存知のように、「ありのまま」は英語の「Let It Go」の日本語訳なんです。当然アテレコではアニメの主人公の口の動きに合わせて訳さないといけけないので、その訳を担当した方がいろいろ工夫した結果、「Let It Go」は「ありのまま」という日本語訳になりました。私は当時、英語の原詞に加え、フランス語、オランダ語、インドネシア語など、自分が理解できる言語の歌詞と日本語版を読み比べたのですが、気づいたのは日本語版がもっとも控えめでおとなしい表現になっているということでした。

自分のありのままを受け入れて、自分らしさを肯定するというのが、日本語の歌詞から伝わってくるメッセージであるのに対し、英語やその他の言語によるバージョンのほうは「もういい、人からどう思われようと、私は

好きに生きる」という、強い決意表明となっています。

似てはいるんだけど、「自分らしさ」を丸ごと肯定するということ、どんな「らしさ」もはねつけて生きたいように生きる、の間には若干距離があると私は思います。ですから、逆に「ありのまま」でという歌詞が私たちの心に響き、それをみんなが歌ったということは、今の日本社会がどういふ社会なのかということとも連動しているような気がします。

そもそも「自分らしさ」の“自分”とは何でしょうか。これこそ自分だと言い切れるものがあるかもしれませんが、それは実は変幻自在なのかもしれません。

最近、本屋さんで平積みになっていたのを見かけた本のタイトルが『ずっとなりたかった自分になりなさい』でした。これはアメリカのベストセラーで、日本でも以前に出版された本のカバーなどをバージョンアップして売り出したものらしいのですが、ふと気になって、原題は何だろうと思って調べてみました。すると英語の原題は「Walking in This World」でした。「Walking in This World」と、「ずっとなりたかった自分になりなさい」。この間にも、これまた距離があるように思います。

### 気分に合わせてもいい「自分らしさ」

「なりたい自分」って本当は一つじゃないかもしれない。自分が何者なのかという認識は、それぞれが持っていると思うんですけど、一旦それが出来上がってしまったら未来永劫変わらないものでもないし、ある意味、日常的にも揺れ動く可能性がある。

私は毎朝、気分やその日の予定—誰に会うか、授業があるか、会議か—を考えたままを選びます。気分は日によってまったく違いますし、その気分に合わせて選べる自由を持ち続けたいと思っています。

とはいえ、周りの人から見た時の私がどういふ属性の人間なのか、どんな社会的役割を果たすべきなのかという点は比較的固まりやすい。そこが頻繁に揺れ動くことは稀で、だからこそ、周囲の期待と自分の感覚のあいだにギャップが生じ、それが大きいほどしんどくなることもあります。

周囲から与えられる評価や期待は、一種の“箱”のようなものです。「なんかちょっと、私が箱の中に閉じ込められているみたいなのがする」と思うことがあるかもしれません。残念ながら私たち人間は、この社会で生きていく上で、何かしらの箱を作らないではいけない、何にもない真空パックの中に生きることはいけません。問題は、その箱が私たちの感覚と常に一致するとは限らないこと。そして、ときには箱を変えたい、別の箱に移りたいと思ったときに、それが許される社会かどうか、という点です。

自分にとっての「自分らしさ」や、自分に合わない箱との付き合い方とは別に、私たちが疑問もなく受け入れている箱の形にフィットしないと感じ、とてもつらい思いをしている人がいるかもしれません。あるいは、私たちが自身が当事者かもしれません。

それを考えるには、やはり「知る」ことが必要です。他者が何を考え、どう感じながら生きているのか。そうしたものに触れる貴重な機会が関学レインボーウィークだと思いません。ぜひ参加してみてください。

(社会学部教授)

2025. 5. 29 (木)

## 「知られたい私」を選びとる

鈴木 謙 介

ですから、神の力強い御手の下でへりくだりなさい。そうすれば、しかるべき時に神はあなたがたを高くしてください。一切の思い煩いを神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

(ペトロの手紙一 5: 6-7)

### 「自分らしい自分」とは？

今日は「自分らしさ」がテーマになっていますが、最初にひとつ皆さんに質問してみたいと思います。次のうち、あなたがもっとも「自分らしい自分」だと感じるのはどれでしょう。

1. 「関学生」として、社会的に認められた自分
2. 気兼ねしないでいい友人と過ごしているときの自分
3. 誰のことも気にせず好きなことだけをしているときの自分

この3つのうちから選べと言われると、たぶん、3番という人が多いんじゃないかと思います。私も同じような気持ちです。普段からテレビに出演する機会が多いんですが、街なかで視聴者の方に見られたり、声をかけられたりすることもあります。そうすると、「テレビに出ているときのイメージを裏切ら

ないようにしなきゃ」と思って、普段は絶対しないような笑顔で、ものすごく愛想よく応対するんですね。

だから、「誰にも見られていないときにこそ、自分らしくいられる」。言い換えると「他人に見られている自分はほんとうの自分ではない」ということになりそうです。でもほんとうにそうでしょうか。たとえば大谷翔平選手が「マウンドにいる自分にはせもの自分で、ほんとうは一人であるときの自分こそ自分らしいのだ」と言い出したら、そんなことないよって言いたくなりませんか。

実は社会学では、「自分らしさ」を考えるうえで、「他人の視線」をととても重要な要素だとみなしています。というのも社会学では「知られる私」と「知る私」という自己の2つの側面が関係し合って「私」というものがあるのだと考えているからです。

### 社会学の考える「知られる私」

このことについて説明するために、社会学

者の牧野智和さんが最近出された『社会は「私」をどうかたちづくるのか』の中から面白いデータを紹介してみましょう。牧野さんによると、若者を対象にした調査データでは、「今の自分が好き」「今のままの自分でいい」という人の割合は、2012年から2022年の間にそれぞれ10ポイント近く増加しています。つまり、自分に対する肯定感が高まっているんですね。

一方で、「仲のよい友だちでも自分のことを分かっていない」とか「他人と同じことをしていると安心だ」という人の割合も増えています。自己肯定感だけでなく、友だちへの疎外感や周囲への同調傾向も強まっているんですね。

牧野さんはこの背景に、SNSの普及があるのではないかと論じています。つまり、いまはSNSでもサブアカウントを作って、自分の見られたい相手にだけ、自分の見られてもいいところを見せることができる。言い換えると、「飾らない自分」を表現し、発信する場が増えている。だから自己肯定感も高いけれど、一方で、人によって自分の見せる顔をいくつも使い分けているので、それらすべてを知っている人は少なくなるし、多くの人に見られる場面では人に合わせておきたいと思うようになるのではないかと、このように思います。

非常に面白い仮説だと思うんですが、それよりも皆さんに気にしてほしいのは、「サブ垢で気兼ねせずに自分を発信できるようになっても、そのせいで他の場面ではかえって自分らしくいられなくなってしまう」ということです。こうした「うまくいっているように見えて、別の面から見るとうまくいっていないことを引き起こす」という現象こそ、社会

学が特に注目するものなんですね。どうしてこんなことが起こるのでしょうか。

社会学では、「自己」というものは「他者という鏡」を通して見るものだと考えています。もしかするとみなさんの中には、自分というものは、誰にも触れられない心のうちにある炎のような存在とか現象のようなもので、他人はそれに触れることはできないと思っているかもしれませんが、でも実は、自分以外の人の存在がなければ、私たちは自分というものを認識することすらできないんですね。

たとえば「今日の私のメイクはばっちりキマった」と思ったとします。さて、この「よくできたメイク」というのは、みなさんの心の中から自然に沸き起こってきた感情でしょうか。実際は、「以前にアプリで見たインフルエンサーと同じような仕上がり」だから「ばっちり」だと思うんじゃないでしょうか。あるいは、そもそも「私は〇〇だから自分らしい」と考えたり表現したりする言葉こそ、みなさんが生まれたときには皆さんの中にはなかった、後から勉強して覚えた言葉ですよね。

私たちは、誰かの言葉や評価、反応を通して初めて、自分がどういう存在で、何を考えていて、どうなるのが理想であるのかを理解することができる。これが社会学の考える「知られる私」としての自己です。

## 「私」を選びとるために学ぶ

じゃあ、私たちは結局、人に評価されて、人に合わせて生きているだけなのか、と思ったかもしれませんが、でも、そうでもないんですね。

私たちは、他人からの評価が芳しくなかったときに、「あ、思ったよりうまくいかなかった」と思って、自分の行動を修正することがあります。また、人が自分のことを誤解している、つまり「間違った見方をしている」と思ったときには、それを訂正してもらえるように働きかけることもできます。たとえば「派手な服装をしているからどうせ勉強なんかしないだろう」と思われているな、と思ったら、授業で積極的に発言して、実は勉強ができるんだぞ、というところを見せることもできるわけなんですね。つまり「知られる私」に対して「知る私」が反応することで、完全に自分の思い通りにならないにしても、ある程度まで「自分らしい私」と「他人に知られる私」をすり合わせていくこともできるということです。このあたりの詳しい話は、牧野さんの本がとて素晴らしい社会学の自己論入門になっているので、ぜひ読んでみてください。

さて、私が最後にみなさんに伝えたいのは、「自分らしい自分でいるために必要なこと」のひとつとしての「勉強」の価値です。

最初にお話したような「自分らしい自分は、誰にも見られていない自分だ」とか「自分らしさは自分の内側にあって人に触れることのできないものだ」と思う人からすると、勉強したり、誰かの本を読んだりして、その言葉や知識に影響されると、「ほんとうの自

分でなくなる」という風に思うかもしれませんが、確かに、人の言葉の受け売りで喋っていると、なんだか全然人の心に響かない、うわべだけの伝え方になりがちですよ。そんなことより、自分の中から出てきた素直な言葉で自分を表現する方がいいのだ、と思う人もいます。

でも、勉強して知識や考え方、表現の方法を学ぶと、もっと自分らしくいられるようになるかもしれないと思うんです。美しい夕焼けを見たときに「ヤバイ」「エモい」と自然に出てくる言葉で表現してもいいけど、「オレンジから青のグラデーションが、自然だからこそ出せる色合いだよな」って言えたら、それこそ自分だけの感想を、自分らしい言葉で伝えられるかもしれない。

自分らしくいられる、誰にも見られない瞬間以外は、目立たず、当たらず、障らず、自分を押し殺して人に合わせている方がいいんだ、という若者が増えているのだそうです。でも、そうやって人に合わせていると、いざ「あなたは何をしたいの」「あなたはどう考えているの」と言われたときに、「いやぁ…」と何も言うことがなくなってしまうかもしれない。学ぶ、勉強するということは、それによって「知られる私」を選びとるための、この世界を生きる大事な武器や鎧を手に入れることかもしれないですね。

(社会学部教授)



## Ⅱ. しんどくなった時

2025. 6. 11 (水)

## 「安心して悲しむ」ということ —喪失の先に見出した光

金 菱 清

「辛い」の究極と、忘れ去られる恐怖

しんどいというのは体の体調の弱まった様子を示し標準語では「疲れた」と「辛い」という表現があります。今日は後者の辛い究極の形を知る事でそこから学ぶべきことを考えたいと思います。私の専門は環境社会学や災害社会学でどちらもフィールドに出かけて行って人のお話を聞きます。環境も災害もどちらもたいへんシビアな人に出くわしお話をしてもらうこととなります。ですが、ずっと聞き続けるとかすかな希望のようなものを受け取ることがたくさんあります。私がほんとうに辛くなった時、このような人々を思い出しながら、そこから切り抜けることがこれまでも少なからずありました。

とりわけ災害では愛するべき人が突然お別れもせずその人のもとを去っていきます。生者の世界で誰からも完全に忘れ去られると、死者の世界からも完全に存在が消えます。亡くなった者は「二度目の死」を迎えます。メキシコの死生観をもとにしたディズニーの『リメンバー・ミー』は、年に一度死者が家族の元へ帰る死者の日を扱った映画です。祭壇の上には亡くなった家族の写真が飾られ、死者はそれを依り代に現世へ来訪します。生きている家族に忘れ去られてしまう

と、死者の国から存在が消されてしまう運命が待ち構えています。音楽をもとに死者の記憶を手繰り寄せ、家族の絆を取り戻す物語です。

二度目の死と、生き続けるための葛藤

災害を研究してきた私がこの話が気になったのには理由があります。災害で亡くなった人は、そこから生きられないだけでなく、それまで生きてきた証さえ社会的に消されます。たとえば、学校のホームページから子供の姿が無くなっていることに気づいた親御さんが泣きながら尋ねると、教育委員会からの通達で震災により亡くなった子供が写っている画像は削除するよという回答を聞いてショックで過呼吸を起こしてしまったのです。

このように死者は、二度目の死を迎えさせられます。それでは、生き残った人々はどうのように忘れずに記憶を留めておくことができるのか。ただし遺族が死者を思い出すことは葛藤を抱えることとなります。というのも、忘れないように脳裏に焼き付いている反面、亡くしてしまったことに対する自分の罪意識を抱え込んでいます。この葛藤を調整しその人なりの人生を楽しむためにはどういう方法

があるのか。しんどいのは、何か良い方向に一直線に向かうのではなく、その人なりの妥協と調整が必要になってくるのです。

感情を失った「ロボット」のような日々

震災遺族の話を書けばよほどあの世に旅立つ方が楽なのではないかと思ってしまいます。けれどもこの世に辛うじて留まり続ける意味について考えてみたい。

今日お話にあげるご遺族の遠藤綾子（りょうこ）さんは、宮城県石巻にいらっしゃって、中1の長女花さん（当時13歳）、小4の長男侃太君（10歳）、小2の次女奏さん（8歳）の3人の子供を津波で亡くしました。これを聞いただけでも絶望です。

夫が地震のあと学校に子供を迎えに行っても3人の子どもたちを母の家に預け、親戚の様子を見にいって。まもなく夫は津波にのまれ命々々瓦礫から抜け出したが、足を骨折し血だらけだった。翌朝子供たちを捜し歩いていると母の咽び泣く声が聞こえ、その腕には冷たくなった子供が抱かれていたのです。子供たちを家に戻さなければ、生きていたのに……。自分を恨んだ。同じ日に長女も見つかった。

綾子さんは三日目二人の娘の変わり果てた姿に泣き崩れた。長男を捜し歩き一週間後見つけました。彼女に聞くと「最初はその（死ぬ）ことしか考えていなかった。侃太（かんだ）が見つかったらこの世に生きていても意味がないと思っていました。皆な（私を）一人にしないようにしていた。でもその力さえなかったというか、ロボットと同じ。目の前で見ているんですけど何も感じな

った」と言います。

楽しいことや綺麗に着飾ることに罪悪感を持ち風呂に入ることも拒んだのです。毎日ワイン一本を夫と飲み続け、健康に気も使わず長生きしようとも思わなかったのです。夫が許せず離婚まで話し合ったのですが、すんでのところまで止まって、そうだ子供との思い出話は夫を通じてのみだと気づかされた。

「安心して悲しむ」ということ

ロボットだった自分を感情のある人間に変えたものは何だったのか。ボランティアから自宅跡地でバーベキューを打診されたが、震災まもない時期で信じられなかった。だがやってみると近所や知り合いから久しぶりに笑い合えたと喜んでくれた。ありがとうと帰っているのを見てこれは理屈ではなく、彼女の心がずっと動かされた。まだ生きていていよって言われている感覚になり、心の奥底に自分への肯定感が残されていることに気づかされた。何か役に立てることが生きてても意味がないという感覚をなくし心身共に健康でいるきっかけとなったのです。

周りから悲しみを乗り越えろとか受け止めろと言われていたが、彼女自身次第に乗り越えたり受け止めなくてもいいし、一生抱えたまま開いた穴はそのままでもいいと思うようになったのです。

苦しみや罰をなぜ受けたのかを考えた時に普段の日常の行いや考えが悪いからだと考え始めたのです。すべてをマイナスに結び付けた。元々東京の方で夫が東北に帰りたい時に断ればよかった。結婚しなければよかった、子供を産まなければよかった……。どこまでも「たらればの話」を思い浮かべていまし

たが、ほんの一瞬だけ自分を楽にするだけで無限地獄に陥りました。

子供たちのことを一日一回も思い出さない日はないですが、年月が経つと泣く内容も変わってきました。彼女の父親が編集してくれた子供たちの動画を十年経過した2021年に送ってくれた。最初子供の声を聴いたらパニックになるのではとしばしば保管していたが、父親の意を汲んで正月酒の勢いをかり夫と見てみました。

それが可愛かったのです。こんな声だったんだと、ニコニコ笑ったりして可愛かったから自分がこんなに悲しいんだということがようやく理解できたのです。だから悲しくてもいいんだときちんと周りにも伝えるようになった。強い悲しみや深い悲しみにはきちんとした理由があり、安心して悲しんで良いと思えたのは、父親の動画がきっかけだった。ここでのひとつのキーワードは「安心して悲しむ」という言葉です。

もうひとつ、安心して悲しむことを教えてくれたのは、石巻市に英語教師として赴任していたアメリカ人のテイラー・アンダーソンさんの遺族でした。24歳のテイラーさんは、「日本に行って子供たちに英語を教えて日米の懸け橋になりたい」と願って来日しましたが、津波の犠牲になった。

彼女の両親は、娘の「記念基金」を立ち上げ、亡くなった娘が一番喜ぶのは自分たちが彼女に代わって日米の架け橋になることだと考え、この基金をもとにテイラーさんが勤めた学校に本を贈り始め、10年間で二万冊にもなったのです。そしてその本棚の依頼として木工職人だった綾子さんの夫に白羽の矢があたったのである。偶然にも綾子さんの三人の子供たちも学校でテイラーさんに英語を

教わっていたことを後から知ります。

テイラーさんの両親に会った時に、「子供たちも私たちが幸せになることを望んではずだから、そうならないといけない。でもそれは単独でやろうとするとすごく難しい。ただ力を皆で合わせて一緒に叶えられるように動けばいいんだよ。綾子も必ず生きていたらいいことがあるから。何か楽しいことを見つけて幸せな時は幸せだと思っていたらいいから」と言ってくれた。自分たちの生活や仕事も大事にしようと思ってることに深く共鳴した。

「弱い主体性」の立ち上げ——子供の目になって、共に人生を楽しむ

大震災という不条理に対して、罪悪感を覚えることなく、亡くなったことを糧にしながらそのことで自分たちに何ができるだろうかと問いかけることでした。

綾子さんはいいです。

「自分たちが何かしてるっていう気持ちは12年間なくなりました。なんかやっぱさせてもらってるということはすごく感じてるところです。子供のおかげでいろんな出会いがあったりとかさせてもらったりとかしてる人が多いから、やっぱり子供あっての12年間だった。(中略)一緒に生きてるっていうのは、綺麗なものを子供のために見るということではなくて、子供も一緒に楽しんでも思うように、一緒に生きてるような感覚がする」

このように、綺麗に自分を着飾ったり、うれしく思うようになったのは、「子供の目」になって子供の感じるままに、自分が楽しんでるのは子供も楽しんでる人生だったらいい

のではないかと思ひ始めたからなのです。それは弱い主体性の立ち上げです。これがふたつめのキーワードです。

「自分たちが何かをしているような」積極的な自己はなく、常に自分が何々「させてもらっている」という受け身な主体性です。この消極的な主体性に喜びを見出し、生きるこ

との意味を噛みしめて人生を楽しむものに転換しているのです。亡き人を記憶に留めるとともに、自分らしさの生き方を「安心した悲しみ」として矛盾しない形で生きているのだと思います。

(社会学部教授)

2025. 6. 17 (火)

## 自分の置かれた世界とそこから逃げたいと思うこと

高原 基 彰

### 馴染めない環境

自分の個人的な話を授業とかではしないの  
で、いつもチャペルではちょっとさせてもら  
っています。私がまだ若かった頃のお話をさ  
せてもらいたいと思います。

私自身は神奈川県川崎市というところの  
出身です。高校まで、進学校とかでは全然な  
く、公立校です。関西だと公立校の方が良い  
ことも多いと思いますが、関東の方だと、公  
立校というのは一部を除くと基本的に非進学  
校です。だから、私のクラスメートでも、4  
年制の大学に行ったのは1割くらいしかい  
なかったです。

たまたま、少し試験が変わっているICU  
(国際基督教大学)という大学に受かって、  
私一人だけが結構良い大学に行ったという感  
じだったんです。でもICUって良い大学だ  
から、各地の進学校から来た学生が多いし、  
教授もその分野で有名な人も割といるし、何  
よりみんなすごく勉強熱心なんです。一応私  
もついていこうとするんですが、なかなか難  
しくてですね。

社会学でいう「ハビトゥス」というんです  
かね、立ち居振る舞いが違うんですよ。当時  
の私が知っていた人たち、地元にいる人たち  
と、大学で会う他の学生もそうだし、先生な

てなおさらです。地元にはいない人たち、  
ビシッとスーツを着た、いかにもインテリみ  
たいな人たちばかりで、結構面食らっちゃ  
ったんです。

だからこそ、というんですかね、勉強して  
みたら意外と面白くて。それで、なんか間違  
って大学院に行こうかなって思っちゃったん  
ですね。その前から勉強していた本当に頭の  
いい人たちというのは、あんまり大学院とか  
行かないですね。ちゃんと良いところに就職  
します。当時は就職氷河期と言われまして、  
就職が非常に厳しい頃だったんですけども、  
ICUはすごく良い大学でみんな優秀だ  
ったので、大体良いところへ行きました。

私は東大の大学院に行くことになったん  
ですけど、もちろん馴染めないんです。馴染  
めるわけがないですよ。でも、修士論文を書  
いて修士号というのを取った後、結局博士課  
程に進学しました。それが24歳くらいの時  
ですね。その頃の大学院というのは今より全  
然緩くて、ある程度ゼミにさえ出ていれば単  
位はもらえるんです。それ以上のことは「勝  
手にやれ」という感じですね。今思えば私に  
とってはそちらの方がまだ全然良くて、「こ  
れをこう書け」みたいにキチキチ言われてい  
たら、もっと早くにはっきりやめていたと思  
います。

## 同じ場所・世代の中の違う世界

でも修士号を取った後くらいに、これまでずっと溜まってきた何か、違和感が爆発してしまったというか、すごく嫌になっちゃったんですね。

博士課程になると、必要な単位もぐんと少なくなるし、大学にあまり行かなくなってしまって、そういう頃に知り合いになった人たちがいて、その人たちが吉祥寺というところの近辺に住んでいたんですね。当時西暦2000年代初頭ぐらい、今ほどではなかったと思いますけれども、まあまあな高級住宅地ではありました。だから駅2〜3個は離れないと安い物件はなかったです。そんな感じでみんな一人暮らししたり、ルームシェアしたり。

吉祥寺は、そういう住宅地と、商圏の両方がある街です。大きな商店街がいくつかあって、飲食店も多い。小さい百貨店もあってですね。そういうものが商圏として成立しているので、そこで働く人たちがいるんですよ。その中には、多くのフリーターという人たちが含まれました。

住宅地としての吉祥寺に住んでいる、余裕のある人たちは、だいたい都心の企業に働きに行くわけですね。ですけれども、吉祥寺には商圏もあると。おそらく昔からの流れとしては、もともと割と稼ぎのいい旦那さんと結婚している、これまた余裕のある奥様方がそこでショッピングすることを想定しながら、発展してきたような街なんだろうと思うんです。で、そこで働く人もいるわけです。

就職氷河期に就職の難しかった当時の若い世代が、大量にアルバイト、フリーター層に流入し、今でもそのままである、という話は

現在でもニュースとかでよく言われていますね。ちょうどその時代で、だから吉祥寺で働いているフリーターの人ってすごくたくさんいて、その友人たちというのも、大半がそうでした。もともと、私自身がどっちかっていうと、10代の頃からの流れで言うと、そういう人たちに近かった訳です。大学とか大学院で出会う人よりは、はるかに。

それはふたつの違う世界だったんですよ。世の中にはいくつも違う世界があると認識できる環境にいたというのは、ある種ラッキーだったのかもしれない。ちょっとみんなに厳しいことを言うと、ある同じ場所や、同じ世代の中でも、違う世界があるんだということに気づく機会は、今だいぶ失われているような気がします。良い大学に行って良いところ就職した人と、フリーターになった人というのは、住む世界が違います。昔からの古典的な、かつ残酷な言い方で言えば「階級」と言ってもいいでしょう。もちろんどちらがより幸せだとか断言することは誰にもできません。しかし「階級」の違いがあるのは事実で、そこに違いはなく平等だと考えることの方が有害なウソであり欺瞞であると私は実感として思っています。

今は就職率が良くなって、フリーターというのは就職氷河期の時代で終わったかのように思われているかもしれませんが、しかし就職が良くなった理由は、日本でどんどん少子化が進んで、かつてフリーターがしていた仕事も正社員という名目にしないと人が集まらなくなったから、それだけです。違う世界であること自体に、そこまで大きな変化などありません。「就職率90何%」とかいう言葉で、それに気づく機会が失われているとすれば、皆さんにとって不利益なんじゃないかなと思

ったりするんですが、今はそのことはちょっと置いておきましょう。

### 都市の中の「村」

私もフリーターの世界の中で過ごしていました。そういう人たち向けの、安い飲み屋とかもあるわけです。なんだったら、ほとんど同じような立場の人が飲み屋を開いたりする。そうすると、仲間だからすごく安く飲ませてくれたりして。そういうことをやっていると、経営を長続きさせるのは難しかったりもするわけなんです。

そんなことが、吉祥寺という当時の街にはいっぱいあって、すごく楽しかったんですよ。言ってみれば、一種の「村」があったんですよ。講義でしゃべっているようなことを言うと、アメリカのハーバート・ガンズが1960年代に書いた、『都市の村人たち』という都市社会学の古典があります。大都市というのは、匿名性が高く、人間関係が希薄化するものだという考えに反論して、エスニシティや階級に沿った、むしろ緊密な「村」みたいな人間関係を育むものでもあるんだと言った本です。ボストンのイタリア人街の、労働者階級コミュニティの現地調査から、そういう主張をした。しかし最終的に、大資本による都市再開発に巻き込まれて、その街が消滅してしまう所でこの本は終わります。

当時の友人たちは、大学に行かなかった人、また中には進学したけれど残念ながらレベルが低い大学で、当時は就職氷河期ですし、結局アルバイトしかなかったという人たちでした。だけど、みんなが集まって夜な夜な飲んで楽しく暮らすというようなところがあって、私もそれがすごく楽しくて、

そういう生活が2年ぐらい続いたんです。でもね、途中で気づき始めるんですけど、いろいろおかしいことが起きるんですよ。典型的には、健康保険証をもってない人がいるんです。社会保険料を払えない、要するに国民健康保険ですね、だから病院に行けない奴とかがいる。10割負担になっちゃいますから。または、家賃を払えないから追い出されちゃうとか、あとすごく変な職場、アルバイトだけだとすごく変な仕事で体を壊しちゃっているとか、もうすごく変なことがいろいろ起きていて、

私はある時から、ちょっとこれはおかしいな、と思い始めたんです。下手に社会学とか勉強していたこともあってですね。こういうのってやっぱりちょっと権利的に問題なんじゃないか、とか思うわけですよ。それから、当時はフリーターというものの自体が問題になり始めた時期でもあって、「非正規職ユニオン」みたいな新しい労働組合なんかができ始めている頃だったんです。

それで、周りの人たちに、「こういうことって、ユニオンに相談とかしたほうがいいんじゃない?」みたいなことを結構言っていたら、めちゃくちゃ嫌われ始めてですね。「何こいつ」みたいな。「こいつやっぱり結局大学いいところ行ってる、俺たちと違うじゃねえか」みたいな感じがムンムンに出てきて、わーっと嫌われて、

結局、いついていたルームシェアの部屋も出ないといけなくなっちゃって。そうすると、もう1回実家に戻るしかないってなる。でも2年ぐらい大学院も全然行ってなくて、もうその村の住民のつもりでいたって言えますか。だからもう、ほとんどの友達というのは、吉祥寺の周りの人たちになっていたん

です。だけどそういうことがあったから、一気に全部なくなっちゃって。友達が誰もみんな電話とか出てくれないんです。めちゃくちゃ落ち込んで。

### 置かれた世界の中で自覚を持つこと

たとえば当時一番ひどかった時でいうと、どこでもいいですけど街を歩いていると、ビラを配っている人とか、カラオケの看板持ってカラオケの宣伝をする人とか、いるでしょう？ああいう人を見るだけで本当に嫌になっちゃうんです。これもバイト、あれもバイト、資本主義ってもんが、おれたちをどんどん悪い立場に押し込めていやがるんだ！みたいな感じになって、すごくムカついてきて。街を歩くのも嫌になっちゃうぐらいに。

そんな時に、友達というのはありがたいもので、大学院の時のかろうじて連絡をとっていた友人が一人だけいたんですね。連絡して、彼の家に行ったら、すごく長々と話を聞いてくれて。

「お前ね、分かったろ？」と。「お前はそうやって、逃げてばかりいただろう。逃げ場を見つけたつもりでいたかもしれないね。だけど、本当にその人たちみたいに生きる覚悟があるわけでもないだろう？今さらお前の性格で、会社に就職もできないだろうし。だからお前は論文を書いて、ちゃんと研究者を目指すしかない、それしかないんだよ」みたいなことを、朝方ぐらいいまで長々と説教してく

れて。

それで私は一応、心を入れ替えたと言いますか、そこからいろいろ研究活動をして。最初の本を書いたりしていたというのが、大体私の20代後半です。それからいろいろしていたら、35歳の時にこの大学に拾ってもらえたという。

ということで、何が言いたいかというと、「しんどいとき」というのは、比較的まだ若い時に多いんじゃないですかね。若いというのは、イコール社会的な力がないということ、弱者ということですから、まったく良いことではないんです。そういう時にしんどいことがあるかもしれない、逃げたくなるかもしれないし、たまには逃げてもいいかもしれませんが、やはり人には、自分が置かれることになったそれぞれの世界というものがあるんだと思うんですね。場所のことではなくて、場所はもちろん変わることが大いにある。もっと大きな意味での話ですね。結局は、その世界の中でこそ進む道を探した方が、おそらく良いんでしょう。

だから「しんどいとき」というのは意外と、それは自分の置かれた世界の中で、次の道が見つかるまでの間のことかもしれない。だから、そこで見つけるべきものとは何かというのを、自分であらためて考えてみるための時期なのかもしれません。と、私の経験から言えることを皆さんにお伝えして、私のお話とさせていただきます。

(社会学部教授)

2025. 6. 25 (水)

## しんどくなったときに、思い出してほしいこと

長 松 奈美江

### しんどかった若い頃

今日は「しんどくなったとき」というお話をさせていただきます。先日、「社会学入門」の授業でゲストとして「社会学との出会い」という話をさせていただきました。その中で、今より若かった時代、つまり10代、20代、30代の頃のほうが、今よりもしんどかったという話をしました。私は今40代ですが、人生がとても楽しくて、あまり悩むことがありません。その話をすると、1年生の皆さんからとても大きな反応がありました。「今はすごくつらいことがあるけれど、少し頑張れば、その先には楽しいことがあるのかもしれない」というコメントをいただいたのです。

振り返ってみると、私が皆さんくらいの時期は、本当にしんどいことが多くありました。何がしんどかったかという点、自分がどのように生きていくべきかを悩み続けること、それ自体がとてもつらかったのだと思います。

例えば、私の就職活動はうまくいきませんでした。大学3年生の頃から就職活動を始めましたが、あまりにしんどすぎたので「大学卒業後に就職する」という道は選ばず、大学院に進みました。大学院生になって、「不

平等」や「仕事」「労働」といったテーマを研究したいと思うようになり、「公正」や「JUSTICE」という概念に強く惹かれました。

ただ、「公正な社会」という抽象的な概念を、どのように研究の中に落とし込めばいいのか分からず、10年近く悩み続けました。今は、具体的な研究テーマやフィールドがあり、明確な方針をもって研究ができていますが、大学院生の頃は本当にしんどくて、夜も眠れないほどでした。常に研究のことを考え続けていた時期がありました。

しかし、今はそうした悩みはほとんどなく、夜もぐっすり眠れています。あまり悩まなくなりました。でも、あの頃、夜も眠れないぐらい悩んで、しんどいことがあったからこそ、今の自分があるのだと思っています。

大学生や大学院生の頃は、就職活動や修士論文、博士論文などの大きなイベントがあり、それがしんどくて、とても悩みました。それに、特別なことがなくても、日常的に気分が落ち込むこともよくありました。私はかなりポジティブな人間で「自分は何でもできるんだ」という自己効力感にあふれている時もありますが、「自分はなんてダメなんだろうか」「自分は何もできない」と、自分を否定する感情に支配される時が度々ありまし

た。

そんなとき、友人から言われた言葉が、今でも忘れられません。友人は、「しんどい気持ちを抱えて、悩むことに意味があるのだ」と言いました。「しんどい思いをしなければ成長できない」と言ってくれたのです。その言葉を与えてもらったとき、心がすごく軽くなったことをよく覚えています。しんどいことは悪いことではない。しんどい時こそ自分がより成長できる時なのだと。しんどいことは昔よりもすごく少なくなりましたが、今でもそう思うようにしています。

今、しんどいときは

40代になった今、しんどいことは以前より少なくなりました。自分が何を大切に、どう進むべきかという価値観が確立してきたからだと思います。ただ、それでも今でもしんどいと感じることはあります。特に、家族や子どもと向き合うときです。私は二人の娘がいます。8歳と6歳で、現在は小学校に通っています。「働く母親」のなかには、「子育てより仕事のほうが楽」と思う人が多いと思います。私も月曜日になったらすごくほっとします。「やっと仕事に戻れる」と思うからです。

子育てがしんどいのは、予測できないことが多く、自分ではコントロールできないことがすごく多いからです。なぜかという、やはり他人のことがよく分からないからです。たとえ自分の子どもであっても他人なので、なんで泣いているのかなとか、なんで怒っているのかなとか、よく分かりません。今、成長して言葉が話すことが上手になってきても、何を考えているんだろうかって分か

らないことが多いです。

特に8歳の長女はとても気が強くてすごい言い争いになるんです。毎日のように言い争いをしています。普段は穏やかな性格の私でも、自分では抑えきれないような怒りの気持ちが湧いてきて、自分の声なのかと思うぐらい大きな声が出ます。自分の感情をコントロールできない、自分と子どもとの関係性もコントロールできない、そういうことがよくあります。言い争いをしてしまった後になって、なんで自分の感情をコントロールできなかったんだろうと、本当にしんどく感じます。

それでも、子どもを持ったことは自分にとって良かったと感じています。子育てを通じて、しんどい思いをして、自分が成長することがすごく多いからです。人間ってすごく複雑な生き物ですよ。特に赤ちゃんや子どもは何を考えているのかわからないし、怒りっぽかったり、すぐ泣いたりします。それに、赤ちゃんはすごくちっちゃい状態で、何もできない状態で生まれてきます。首も座ってなくて、ふにゃふにゃで誰かがいないとすぐ死んでしまうような、そんな存在として生まれてくる。すごく未熟で何もできない存在がどうやって大きくなっていくのか。まずは泣いたり怒ったりして、自分の感情をうまく伝えられるようになる。それから、言葉を覚えて自分のことを伝えることができるようになる。そうすると、他人のことを思いやることができるようになります。お友達のことを心配したり、ママやパパのことを心配したりすることができるようになる。人間がどうやって成長していくのか。赤ちゃんが子どもになって、子どもが大人になっていく様子を観察できて、人間について理解が深まることが、

私の大きな喜びの一つでもあります。

### ジュネーヴで過ごした一年間

私は昨年度（2024年度）、学院留学制度を利用して、スイスのジュネーヴに1年間滞在しました。家族4人での滞在でしたが、楽しいことだけでなく、苦勞したことも、しんどいこともたくさんありました。

ジュネーヴはスイスの端っこにあり、フランスと接しています。ジュネーヴで話されている言語はフランス語です。フランス語は私も夫もあまりできないし、娘たちもフランス語の知識はゼロの状態です。現地校に通い出しました。娘たちは、最初はフランス語が全く理解できなくて、日本人であることが現地では非常に珍しかったので、からかわれたり、からかわれて嫌と言えずにクラスメイトに手を出したりすることがよくありました。小学校がアパートのすぐ先にあったのですが、歩いていると喧嘩している娘たちの姿を目にすることがありました。でも、1年間の滞在が終わって日本に帰る頃には、娘たちはすでに現地校に溶け込んでいて、クラスメイトたちがすごく悲しんでくれたんですね。最後は娘たちの名前をコールしてくれて、バイバイって日本へと見送ってくれました。長女はフランス語が好きになり、次女も日本に帰りたくないと言ってくれました。

ジュネーヴではすごくしんどい日々がありましたが、家族みんなでしんどい思いをしておよかったなと今は思っています。日本にいたら、私たちに生活することはすごく簡単です。日本語は通じるし、日本食はおいしいし、便利で安いショップやレストラン、スーパーがたくさんありますね。でも、家族

4人でしんどいことを経験したから、いろいろな成長できたなと今は思っています。例えば、フランス語がわからない移民をケアしてくれる仕組みがたくさんあること、現地の人たちがすごく優しいことを知ることができました。スイスの社会の成り立ちやヨーロッパの社会のことを学び、日本との違いを感じて、いろいろなことを経験して帰ってくることもできました。

日本にいたら、例えば「大学の先生」だったら、大事にされることが多いんですけども、大事にされるだけの環境だと自分はなかなか成長できないんですね。私も、日本を離れた1年間ですごく成長できたなと思います。それは、「自分が何者でもない存在」として扱われる経験をしたからです。例えばメールを送っても無視されるとか、話しかけても無視されるとか、娘たちみたいにいじめられるとか、そういうしんどい経験があったからこそ、成長できたと感じます。ヨーロッパや日本や他の地域における社会の成り立ちについても深く考えることができるようになりました。たくさんの人に無視されたけれど、仲よくしてくれた人たちもいました。私にもすごく大切な友達ができました。

だから、さまざまなことを経験し、それを経て成長できる契機が「しんどいとき」なのだと思います。ですので、皆さんもしんどいことがたくさんあったとしても、その時間は無駄ではないですね。私たちは時に落ち込みます。自分はなんてダメなんだろうかと思うことがよくありますよね。でも、「しんどいとき」は人生において無駄ではなく、とても貴重なのだと思ってほしいです。

（社会学部教授）

2025. 6. 26 (木)

## ラマダンとストライキの体験

鳥羽美鈴

### 海外でのしんどい体験

本日は、「しんどくなった時」という大変興味深いテーマにあわせてお招きいただき、誠にありがとうございます。天気の変化に体がついていけず、まさにしんどい日々ですが、皆さんの御体調は如何でしょうか。

少し自己紹介となりますが、海外で研究調査をすることが多いので、今日は、カルチャーショックからくる海外でのしんどい体験についてお話したいと思います。それによって、限られた時間となりますが、海外の文化を多少なりとも紹介できればと思います。主なフィールドは、フランス、南米、そして最近ドイツで、調査対象の移民や難民に聞き取りなどをしながら研究を進めています。

フランスにはアフリカなどの旧フランス植民地からの移民、南米のペルーやブラジルには多くの日系移民、そしてドイツには、トルコやシリアなどから来た多くのイスラム教徒が暮らしています。また2022年以降は、御存知のように、ロシア侵略によってウクライナ難民が増加しました。ブローカーの手を借りて密入国し、法律には違反しながら西ヨーロッパに滞在して働いている人も多くいます。

しかし私のような研究者が突然訪問して、

彼らの現状や本音を聞き出すことはできないので、彼らのフランス語やドイツ語の学習を助けたり、必要な書類の作成を手伝ったりといった長期的な支援を通じて信頼関係を築くようにしています。そのようにして、これまでに彼らから命がけの移動の話や生活基盤を構築するまでの苦労話などは多く聞いてきましたが、今日は、フランスやドイツという西ヨーロッパの国々で、彼らと一緒に「しんどくなった時」のお話をしたいと思います。

### ラマダンのしんどい体験

一つ目は、イスラム教徒と一緒に体験したラマダンです。ラマダン、聞いたことはありますか？毎年、時期は異なりますが、彼らの多くは定められた1か月の間、断食を行います。水も含めて飲み物や食べ物を一切断つわけですが、これは本当にしんどいです。もちろん、1か月間連続で飲まず食わずでは死んでしまいます。毎日、断食するのは日の出から日没までです。つまり太陽が出ている間は飲食を我慢しなければなりませんし、その時間は日によって異なります。食事の楽しみがない一日は非常に長く、空腹での仕事や勉強は本当に大変です。イスラム教徒によれば、アッラーはどこにいても人々の行いを見

ているという信念のもとに、自分の欲望を制御する鍛錬の期間であるとのことでした。

中東のイスラム教徒というと、遠い国々の話のようですが、日本の大学にも東南アジアの例えばインドネシアなどから来たイスラム教徒の学生はいますので、彼らのラマダン期間中には特に配慮してあげて欲しいと思います。東南アジアからの留学生が多くいる大阪のある大学の教室での出来事です。日本人学生たちが授業の始まる直前までポテトチップスを食べていたときに、そのそばに座っていたイスラム教徒の学生はその匂いや音に耐えているようで本当に辛そうでした。なお、ラマダンとは無関係に、イスラム教で禁止されている豚肉を原材料に含んでいないかについても注意が必要です。一緒に食するときには、ポークエキスパウダーなども使われていないか、しっかり原材料を見てあげてください。

ラマダンの話に戻りますが、この断食の期間が終わった頃には多くのイスラム教徒は太ると言われています。

なぜか分かりますか。太陽が沈むと、待っていましたと言わんばかりに、いつもより豪勢に飲食するためです。太陽が出る前の早朝、あるいは真夜中に、眠いのを我慢して飲食をすることもあります。飲食より睡眠を優先して、後でしんどい思いをすることもあります。毎日、その期間の終わりが見えているということは、しんどさに耐える力を与えますし、何よりもご褒美が待っていることが大きな力となります。そして、ラマダンによって、飲食できることの有難さが身に染みて理解できます。これはぜひ皆さんに体験して頂きたい、しんどさです。但し、イスラム教徒においても、病人などは断食を免除されて

おり、皆さんも体験するときは体調が絶好調の時にしてください！

## ストライキのしんどい体験

さて、二つ目の「しんどくなった時」ですが、こちらは終わりが見えません。また、ご褒美が待っているとも思えません。それはストライキという「文化」が原因です。どのように、しんどくなるかということ、ストライキが発生すると、多くの場合、交通網が混乱して、特に車が無い場合、いつも利用している路線や交通手段が利用できなくなります。迂回経路や渋滞の発生によって、いつもより移動に時間がかかります。ストライキが過激な場合には、身の安全を守るためにそれを避けようと気を使います。それが可能である場合には、アポを取り消すか、外出予定を取りやめることとなります。ストライキは何らかの改善を求めて行われるわけですが、例えば、バスや電車などの公共交通機関を運行する企業で働く労働者が賃上げなどを求めて行っていたりします。他にも、環境保護や戦争反対、男女平等を訴えるものなど、いろいろあります。

日本にもストライキはありますが、フランスやドイツでそれが「文化」ともいえるのは、その頻度が高く、習慣化しているからです。それとは無関係の住人たちへの影響も多大です。しかし多くの人々は、それを当然の権利として受け入れています。この文化にあまりなじみのない私たち外国人や移民・難民にはなかなかしんどくて、精神的にも肉体的にも疲労が募ります。

私がフランスのパリで目にした、あるストライキは平和的でしたが驚くものでした。な

んと大勢の消防署員が、そう分かったのはユニフォームを全員着ていたからですが、勤務時間中に喫茶店に座ってのんびり語っていました。日本でも最近欧米をまねして、テラス席のある喫茶店が増えています。多くのフランス人たちは、暑くても寒くても室内よりテラス席を好んで選びます。彼らも全員がテラス席にユニフォーム姿で座って喫茶しているのです。とても目立っていました。もちろん、このように存在をアピールすることでストライキとしての意味を持つわけですが、ストライキの方法は、プラカードを持って叫びながら行進したり、広場に大勢集まって横断幕を掲げたりするばかりではないのだと学びました。一方で、この日にパリ市内の滞在先が火災に包まれたら、消火してもらえないのだらうなど、不安にもなりました。

ここに、東北大学の小田中直樹教授の『フランス7つの謎』という新書を持ってきました。新書と言っても、初版が2005年で、これは10年ほど前に購入して長らく手元にありましたが、今回、改めてこの本を見直して、フランスにおける「ストライキ」の存在感の大きさを確認できました。気になる「7つの謎」ですが、7つのうち、なんと2つがストライキに関する項目となっています。彼は周囲の人々がストライキを受け入れるのは、「お互い様という心性（しんせい）」からであろうと記しています。

そして、ドイツですが、フランス人と違ってドイツ人は真面目で日本人と同じように時

間を守り、バスや電車も定刻に来る、との情報を得ていました。もちろん、日本人にも不真面目で遅刻の多い人はいますので一般論となりますが、NHK出版の『笑うときにも真面目なんです』というドイツ人がドイツ人の「あるある」を描いたエッセイ集がとても面白く参考になります。ドイツ語の文章や音声もあるので、ドイツ語学習者にもお勧めです。

実際にドイツに行ってみてどうであったかという点、残念ながら期待とは違っていました。車両故障などに加えて、フランスと同じくらいストライキが多くあって、交通網はしょっちゅう混乱しています。多くの場合、ドイツのニュース報道や駅構内の電子掲示板などに早くからストライキの予定は確認できるようになっています。住民たちは、こうして、ストライキの間の迂回経路を前もって確認し、大切な予定があれば、その日はかなり早めに家を出ます。

それにしても、ストライキが原因でしんどくなった時、どうしたらよいか。これについては、今回のお題を頂いてから、長らく考えましたが、良い解決法が見つかっていません。来月からまたドイツに渡って、研究調査を実施する予定ですが、多くの人たちが日常に不満を持つことなく楽しく過ごし、ストライキが発生しないことを祈りたいと思います。

(社会学部教授)



### Ⅲ. 平和を造るために

2025. 10. 2 (木)

## 反戦運動でつながるクィア・フェミニズム

武内 今日子

### クィア・フェミニスト ZINE イベント

「平和を造るために」というテーマで私が思い浮かべるのは、反戦のための社会運動をおこなってきた、ひいては力によって人を支配しない関係を築こうとしてきたフェミニストたちのことです。

私がふだん研究しているのは、出生時と異なる性を生きるトランスジェンダーやノンバイナリーの人たちの人生やアクティビズムの歴史です。フェミニズムと関係ないのではありませんと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、実際には関係があります。フェミニズムは、狭い意味で女性の権利を求める運動ではなく、ジェンダーをめぐる社会的不平等の解消をめざす運動だととらえられますし、トランスジェンダーやノンバイナリーのフェミニストたちも多くいるのです。

夏休みも、アクティビズムを記録するためにあちこち出かけていました。一種のフィールドワークですね。とくに印象に残っているのが、東京の下北沢でやっていたイベント、「NOISY ZINE & BOOK: Culture / Activism / Feminism / Queer の交差点」です。クィアという言葉は、性に関して「ふつう」から外れている。しかしその何が悪いのだという反骨精神のようなニュアンスのある言

葉です。参加したイベントでは、ZINE という小さな、そしてひろくは流通していない冊子をそれぞれの作家さんがつくって販売していました。ノイジー ZINE のノイジーは、うるさいといった意味ですが、ここではわきまえずに声を上げる、という意味が込められているのではないかと思います。ZINE は、たくさん売れるわけではないですが、名も知れないさまざまな人たちが、一人ひとりの声をノイジーに響かせることを可能にしています。そして、同じく声をあげている作家や来場者で交流していくというのがこのイベントの重要なところですよ。

今回ブースを歩いていてよく見かけたのが、「反戦」や「ストップ・ジェノサイド」という言葉です。2023年10月以降、イスラエルの軍事作戦によって、ガザで住居の大量破壊や、医療システムの破壊、住民の虐殺が起こされてきたことは、メディアでもとりあげられているので皆さんもご存じかと思います。ただ、「遠い国での出来事だ」と無関心でいる人もいるかもしれません。フェミニズムやクィアをかかげているブースでも何らかのかたちでジェンダーにかかわる内容のZINE が扱われていることが多いですが、なぜパレスチナへの連帯が表明されるのか、ぜひ考えてみてほしいと思います。

## クィア・アクティビズムと反戦運動の交差

こうした運動のつながりについて考えるために、2点、この日の ZINE や本の内容を紹介させていただきます。

1つは、『No Pride in Genocide! Queer Voices in Solidarity with Palestine』という ZINE です。プライドというのは、性的マイノリティが自分の性にプライドを持って生きていく、ということ掲げてアクティビズムをおこなってきたことをふまえた概念です。世界各地で、レインボープライドというイベントがおこなわれています。この ZINE では、大量虐殺にプライドなど抱けないとして、パレスチナと連帯するクィアたちの声をとりあげています。

レインボープライドの文脈でイスラエル批判が出てくることには理由があります。実はイスラエルは、性的マイノリティの権利を擁護するというメッセージを出してきました。ここには、同性愛嫌悪で保守的、野蛮な中東の国々と、ゲイフレンドリーで先進的なイスラエル、という対比があります。ただし、実際にはイスラエルでは同性婚もできないし、トランスジェンダーの権利も認められていないのですが、このように LGBT フレンドリーだとうたいつつ、他方でガザの人々への人権侵害をおこなうイスラエルのメッセージ戦略は、「ピンクウォッシング」として批判されてきました。これは「ごまかす」という意味の「ホホワイトウォッシュ」と、同性愛者のシンボルカラーとされるピンクをあわせた言葉です。不都合な事を隠すために、あえて良い印象を与える同性愛者のシンボルカラーをまとう、というイメージ戦略があるわけで

す。

具体的に、この ZINE が批判したのは、20 万人以上集まる日本最大のプライドイベント、東京レインボープライドです。東京レインボープライドが、ピンクウォッシングをおこなうイスラエルとのつながりを保っていたことに対して批判が出たのです。昨年まで東京レインボープライドは、イスラエル大使館から協賛を受けていて、冊子でも「中東でありながらもリベラルな街」としてイスラエルのテルアビブを紹介してきました。

この ZINE では、反戦のためにできる行動も紹介されています。これは BDS 運動とよばれています。B のボイコットはイスラエルの商品を買わないこと、D のディベストメント（投資引きあげ）はイスラエルとの資本提携や軍事協力をしている企業との取引をやめること、S のサンクション（制裁）はイスラエルへの経済制裁をおこなうことです。取引をやめるべき企業には、みなさんもよく知るマクドナルドやディズニーなども含まれています。東京レインボープライドは、戦争反対を唱えつつも、こうした企業からの協賛をやめなかったのが、クィア・フェミニストたちから批判されてきたわけです。一連の出来事がこうした ZINE にしっかり記録されていて、それもまた一つのアクティビズムといえます。結果、今年の東京プライドでは、イスラエル支援企業は協賛に含まれていません。

プライドを掲げる、性的マイノリティの運動というのは、別に「性的マイノリティを特別に配慮せよ」という運動ではありません。まずもって人権擁護のための運動なのです。抑圧されてきた人々の人権を求める運動に、人権侵害に加担している企業が堂々としてい

ることは批判されるべきですし、性的マイノリティの権利がピンクウォッシングとして利用されているならなおさらです。だから、反戦運動とクィアアクティビズムがつながっているといえるわけです。

### 身近なところにある反戦運動

運動のつながりを考えるうえで、もう1つ、フェミニズム・マガジンの『エトセトラ』(エトセトラブックス、2024年)の12号「特集：戦争をやめる」を紹介したいと思います。

このマガジンに寄稿している、憲法研究者である清末愛砂さんは、医療奉仕団のメンバーとして実際に封鎖下のガザにも何度か足を運んでいる方です。清末さんは、小さな暴力と大きな暴力とはつながっていると論じています。たとえばガザを封鎖し、支配を続けるイスラエルの論理は、一見小さな暴力にみえるDV加害者のメンタリティとも非常に似通っているといます。ガザの人がイスラエルに少しでも抵抗しようものなら、イスラエルは支配者に逆らった懲罰として攻撃を加え、支配者としての力を見せつけて、責任をガザの人に押し付けてきました。それゆえ、戦場は遠く離れたところだけでなく、自分の足元にもあるというのです。そして戦争や武力行使をなくすためには、そうしたメンタリティを良しとしない社会を築くことが不可欠だし、社会を構成する一人ひとりが、力による支配を否定する個人になるための行動をおこすことが大事だと清末さんはいいます。フェミニズムはずっと力による支配を否定してきた運動です。そういう意味でも、フェミニズムと反戦運動はつながっているのです。

これは無理やりに、ガザでのことを自分ごととして引き寄せようとするのではないと思います。今回紹介したZINEやフェミニズム・マガジンは、クィア・フェミニズムの闘ってきた問題が、反戦とそもそもつながっていたのだ、ということに気づかせてくれます。

ZINEはアクティビズムの方法のひとつですが、他にもさまざまな行動があるし、皆さんの近くにも行動している人たちはいます。昨年5月、関学のこのキャンパスのスターバックス前で、パレスチナでの停戦を求めるスタンディングデモをしている方がいたのを知っているでしょうか。朝日新聞でも取り上げられていました。その方はこのように言っています。

レインボーウィークを開催している当大学ですが、学内にBDS運動の対象であるスターバックスとKFCが置かれていることにクィア・フェミニストとして懸念を示すとともに、即時停戦とパレスチナの解放を求めます。(朝日新聞、「クィア」な私、パレスチナに連帯 疎外・抑圧の痛み知るから、声上げて行動」、2024年12月25日)

このように、みなさんにとっても反戦運動は身近なものだと思います。私自身、運動について知ってから、キャンパス内を含め、自分からスターバックスやKFCに行くことはありません。レインボーウィークでも——私は実行委員をしているのですが——性的マイノリティのことだけでなく、さまざまな人権問題との交差について考えないといけなと思います。別にスターバックスに絶対に行っ

てはいけないということではなく、まずは自分の生活とガザでの出来事がどのようにつながっているか、反戦運動と人権をめぐるさまざまなアクティビズムがどのようにつながっているかを知ることが大事だと思います。そこから自分にできることを考え始めることができるわけです。

そして私にとっては、こうしたアクティビズムは研究、フィールドでの調査ともつながっています。あなたは何者か、何をしてきたか、何に無関心でいるのか、その場でつねに問われますし、人としての信頼にも関わりま

す。領域にもよりますが、それはみなさんが卒論という形で調査して、研究するときにも同じだと思います。行動している人を冷やかにみるとか、わきまえたほうがいいとか、そうした態度をとるのではなく、まずは知ること、そこからノイジーに声を上げること、無関心から一歩踏み出すことを、自分の足元から反戦運動を続けている日本のクィア・フェミニストたちの姿から考えてみてほしいです。

(社会学部助教)



## IV. 大切な一冊

2025. 11. 5 (水)

## かけがえのない出会い

打 樋 啓 史

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追い剥ぎに襲われた。追い剥ぎたちはその人の服を剥ぎ取り、殴りつけ、瀕死の状態にして逃げ去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、反対側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、反対側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、その場所に来ると、倒れていた人を見て気の毒に思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』この三人の中で、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人に憐れみをかけた人です。」イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」(ルカによる福音書 10: 30-37)

### 人間の強さと弱さ

今月から「大切な1冊」という、本を紹介するシリーズが始まり、今日が2回目です。私は、哲学者・岩田靖夫さんの著作『よく生きる』(ちくま新書 2005年)を紹介したいと思います。岩田さんは、古代ギリシア哲学、特にアリストテレスの専門家、北海道大学や東北大学といった国立大学で教鞭を取られ、晩年はカトリック系の女子大で教えられました。たくさん著作や論文を著してきた哲学者で、カトリック信者でもあります。1932年生まれで、2015年に

83歳で逝去されました。

この本は、2005年、岩田さんが73歳の時に出版され、広く読まれてきたものです。岩田さんはそれまでギリシア哲学・倫理学の分野で学術的な論文や研究書を書いてこられたのですが、その研究成果を、新書として、一般向け、特に若い人向けに、平易な言葉で語りかけるように記した書物です。ですから、若い皆さんが読めば、少し難しいところもあるかもしれないけれど、色々響くものがあると思うんですね。私のゼミでも以前この本を共通テキストとして使ったことがありましたが、ゼミ生からの評価は極めて高か

ったです。

タイトルの「よく生きる」というフレーズは、ギリシア哲学でよく使われた表現で、人間がただ動物として本能で生きるだけではなく、人間らしく生きるとはどういうことなのか、というテーマに関わるものです。これを考えるにあたって岩田さんは、「人間は強くて弱い」というところから議論を始めていきます。

人間には強さと弱さの両方があり、両方が必要です。強さというのは、自分の存在を守るために、動物として生存を維持するために必要になってくる。でも、人間をより人間らしくするのは、強さよりもむしろ弱さであると言うんですね。人間は弱い時にこそ、他者に心を開き、他者の心を理解でき、他者と真に関わることができる。また、弱い時にこそ、存在の根源に触れ、自分を超える次元に触れることができる。これらは弱さを通してこそ可能だと言うのです。これこそが人間の幸せであり、「よく生きる」ということの出発点になるということです。

### かけがえのない他者との出会い

このテーマをめぐって、岩田さんご専門のギリシア哲学、特にソクラテスの話がよく出てきますが、他にもキリスト教や仏教の様々な教えや人物にも触れながら、説得力のある仕方でも論述されています。構成として、「幸福」「他者」「神」「社会」という4章から成っています。本書が出版された頃、私はこれを読んで「本当によい本だ！」と心動かされ、よく学生に薦めたのですが、同じ時期に社会学部の社会学の先生やフランス哲学の先生もこの本を薦めておられて、分野を超え

て高く評価されている書物だという印象をもったのを覚えています。

岩田さんは言います。「自分は若い頃から生きる目的について考えてきた」と、でも答えは見つからなかった。ところが、70歳になって、やっとだんだん分かってきた、と言うんですね。この書物を記した73歳の時に、岩田さんは、「人は何のために生きるのか。生きる目的は何なのか。それはかけがえのない他者に出会うため。これが今の自分の答えです。」と記しておられます。そこで、「かけがえのない他者って誰のこと？」また「どうやってかけがえのない他者に出会えるの？」という問いが出てきますよね。その問いについて考えるにあたって、岩田さんは、先ほど朗読したルカ福音書の善いサマリア人のたとえを引用して話を展開します。

この話、キリスト教学の授業でも取り上げたので、皆さんご存知ですよ。人が道に倒れていた。強盗に襲われて、殴られて、瀕死の状態であって、そこに3人の人が通りかかった。1人目、2人目、これは祭司とレビ人、ユダヤ教の聖職者です。倒れていた人はもちろんユダヤ人ですが、その2人は道の向こう側を歩いていった。つまり助けなかった。3人目がサマリア人。サマリア人というのはユダヤ人とは違う民族。しかし、この人が倒れていたユダヤ人を助けて介抱して宿屋に連れて行った。こういう話です。

サマリア人は、当時のユダヤの社会ではマイノリティー・少数民族で、色んな経緯があって、ユダヤ人から「汚れた者」として見下され、差別されていました。物語のポイントは、いじめられ、差別されていた側のサマリア人が、暴力を受けて、倒れて、死にかけている人を助けたというところにあります。し

かも、普段自分をいじめている憎いユダヤ人を助けたいというんです。「ざまあみる！」とほったらかしにせず助けた、という話なんです。

このたとえ話について岩田靖夫さんは、「これは、疎外された人が、同じく疎外された人に近づいて出会いが生まれている、そういう物語だ」と理解します。つまり、汚れた者として疎外され、差別されていたサマリア人が、暴力を受けて死にかけ、瀕死の状態で倒れているという形で、やはり疎外されている人と出会っている、そういう出会いの景色だと言うわけです。痛みや苦しみを本当に知る人が、同じように痛み苦しむ人に接近して出会うということが、ここで起こっている。いわば弱さと弱さが、痛みと痛みが響き合う出会いが、ここには見られる。それで岩田さんは記します。「人はこのようにしてこそ、本当に人と出会うんだ。これが、かけがえない他者との出会いなんだ。」と。そして岩田さんは、ここにイエスの中心思想がある、と言います。それは、「人は力という幻想を取り払ったところこそ、本当に人と出会う」ということで、その思想がこのたとえによく表れている、と言うんです。

### 弱さを通してのつながり

人間というのはエゴイストで、強さを求めようとする。他者との関わりにおいても、力を求めて、力を得ようとして、強い人に近づこうとする。そうして力を得て、人を支配しようとする。人間ってそういうところがあるわけです。そのために自分を飾ろうとする。自分を飾って美しく見せようとしていたり、お金や権力や地位や色々なもので自分を飾って、

そうやってもっと強い人から何かを得ようとしたりする。

けれども、そんなことをしている限り、人は本当に人と出会うことはできない。それは本当に空しい、うわべだけの接触であって、本当に人と出会うことになっていない。本当に人が人と出会うのは、余計なものを全部取っ払って「ただの人」になった時だ。ただの人、比喩的に言えば「裸の自分」になる。そのただの人・裸の自分が、同じくすべて取り払った「ただの人」である他者と出会うところこそ、深い関わりが生まれる。これが生きる目的である。このように、岩田さんは論述しています。

皆さんあまりピンと来ないかもしれませんが、私は色々な出会いを通して、これが少し分かります。例えば、私はこれまで牧師としてたくさんの結婚式の司式をしてきました。特に、関学では卒業生がランパス礼拝堂で挙式することができて、その司式の牧師を、これまで27年間で100件以上担当してきました。この結婚式の準備のために、カップルのお二人に会って、色々と話します。お二人がどんなふうに出会って、どのように結婚を決意したのかなどお聞きしながら、こちらからキリスト教の結婚の意味を伝えて、一緒に式を作っていくという、とても有意義で楽しい時間です。

その時に、お二人が出会ってから結婚を決めるまでの歴史をお聞きしていたら、多くのカップルが共通して語るのが、まさに「私たちは弱さを通して本当につながる事ができた」ということなんです。二人ともが弱さを体験した時にこそ、本当に自分たちは深いところで一つになる事ができた。お互いに飾って強さを見せ合っている時にはそうなら

なかったけど、病気になったり、仕事が行き詰まったり、そういう弱さを共有せざるを得なくなった時にこそ、お互いの弱さが響き合うようにして、二人の結びつきが強められたというのです。

こういう話を、多くのカップルから聞くんですよ。弱さと弱さでつながっているカップル・夫婦の関係は、ともしっかりしていて強いですね。逆に、もし弱さの次元で会うことを避けようとしているカップルがいれば（私はそういうカップルに出会ったことはないですが）、その関係は割と脆いのかもかもしれません。岩田さんが言われることは、もちろん結婚に限定される話ではないですが、そういう場合にも当てはまると思います。

## 映画『グラン・トリノ』

皆さんは『グラン・トリノ』という映画をご存知ですか？2008年のアメリカ映画で、クリント・イーストウッドが監督、主演の作品です。「グラン・トリノ」とは、フォードというアメリカの自動車会社のなかなかカッコいい車ですが、こんなストーリーです。イーストウッドが扮するウォルトという名の退役軍人が主人公。彼は朝鮮戦争の従軍を経験した人で、妻に先立たれて、息子たちとも疎遠の、気難しい老人です。軍人を退役した後、車好きの彼は自動車工の仕事をしていますが、今はそれも引退して、愛車「グラン・トリノ」や愛犬と孤独に暮らすだけの単調な日々を送っていました。

このウォルト、すごい民族主義者・白人至上主義者で、他の民族、特にアジア系移民を見下して差別する人なんですね。そんな中、ウォルトの住む家の隣に、モン民族という、

アジア系のラオスやベトナムにいる民族の一家が引っ越してきます。もちろんウォルトは強く嫌悪して、この隣人がちょっとでも自分の庭に入ってきたら、銃を構えて「出て行け！」と威嚇するのです。「お前ら、入ってくるな！」みたいな感じで。まあ、そのようにウォルトは本当に嫌な奴なのですが、見ているとだんだんと分かってくるんです。この人、とても痛んでいる人で、寂しい人なんですよね。朝鮮戦争で敵兵を殺した記憶がトラウマになって、ずっと苦しんでいて、それがアジア系移民への偏見の背景になっている。そして唯一心を開くことができた、愛する妻に先立たれて、本当に孤独で寂しい。それなのに意地を張って、周囲の人々に対してトゲを張り巡らして生きている。だから、友達もいない。

その寂しい男が、隣のモン族のタオという少年と出会って、最初は見下して毛嫌いしていたのですが、だんだんとその少年に心を開いて癒されていくんですね。少年タオの方もすごく弱いんです。マイノリティーとして差別されて、学校でもいじめられて、さらにその民族の中でもいじめられている。その弱い少年と、強がっているけど実は弱さを抱えた退役軍人が出会っていく話で、この映画の最後、ウォルトはモン族のために信じられないような決断をします。その地域でモン族が危機にさらされることになり、ウォルトはモン族の人々を守るためにものすごい決断をするという、壮絶かつ感動的な展開になっています。

ここで流れているテーマも同じなんです。人は自分の弱さというところに立った時にこそ、本当に人と出会っていけるということです。「よく生きる」というのは、「生きる目

的」というのは、実はそういうところにあるのではないかということです。強さを誇示して、人を蹴落として勝ち組になろうとする。そんなことだけを求めていたら動物と変わらないですよ。人間じゃなくてね。人間が本当に人間になるには、弱さの次元でつながっていること、弱さの次元で自分を開いて、人を

受け入れて、理解し合っていくことが不可欠なのではないか。哲学者の岩田先生は、この本を通してそう語りかけています。ぜひ皆さんにも読んでいただき、何かを感じ取っていただければと思います。

(社会学部教授・宗教主事)

2025. 11. 6 (木)

## 閉塞感の向こうに

高松里江

はじめに

私は、『世界は小さな祝祭であふれている』という小野博さんの本を、大切な一冊として紹介します。この本は、私が20代の大学院生の頃にオランダのアムステルダムで出会った小野博さんという方が書かれたフォトエッセイです。このエッセイは、岡山県出身の小野さんが東京で大学受験をるところから始まります。受験や、浪人生活、そしてオランダのアムステルダムで写真家として生活を通して、日本での生活の閉塞感や息苦しさをユーモアとともに描いたものになります。

この本を選んだのは、ここにいるみなさんが、10代の後半から20代という多感な時期にあるように思うからです。一般に10代の思春期の頃、中学生や高校生の頃は人生でいちばん多感な時期といわれています。しかし、いま私が自分の人生をふりかえって思うのは、10代の最後から20代の、大学生・大学院生の時期、あるいは職業的なキャリアが浅い時期というのは、少なくとも私にとっては人生でもっとも多感な時期であったように思います。みなさんがそうなるとはかぎりませんが、いま多感な時期を過ごし、またこれからその時期を迎えるかもしれません。大学という場で、視野が広がり、様々な人と交

流し、これまでにない経験を積むことは一見すると自分自身を確立することのようで、自分の変化に直面するという意味では不安定なものでもあります。また、親や地域の保護から離れ、自分自身が新たな世界に直接かかわろうとするなかで、空気のように扱われたり、頑張っても空回りをしたり、これまでにない失敗をしたりする時期でもあります。さらにこの20代の時期の多感さというもの、思春期とは違って注目されず、そして自分自身でも気づくことができず、よくわからない気持ちを抱えたまま過ごすことでもあります。そのなかで抱く息苦しさを、とりわけ日本社会のなかで感じる息苦しさと絶望が、この本のなかで書かれています。

さて、この本の内容に触れていきたいところなのですが、この本はエッセイですので、エッセイという性質上、筆者の小野さんの経歴にも触れながら、少しずつ本の内容をご紹介をしたいと思います。

### 日本の閉塞感

小野博さんは、1971年生まれ、現在、オランダのアムステルダムで活躍される写真家です。1971年生まれということですから、みなさんのなかには、お父さんやお母さ

んが同じぐらいの世代、という方もいるかもしれませんが。いわゆる氷河期世代ともいわれる世代ですので、そのほうが世代としてのイメージがしやすいかもしれませんが、実際、小野さんも、少なからずこの世代、その時代の閉塞感は背負っているように思います。この書籍が出されたのが10年ほど前、小野博さんが40歳ごろに出された書籍であります。が、大学受験から、30歳ごろにアムステルダムに住むまでの生活を書かれています。

小野さんは、岡山出身で、2年浪人の末、名門・多摩美術大学彫刻科に入学、卒業します。1年目は岡山で、2年目は東京で浪人を行います。今はインターネットやSNSが身近になりましたので、地方にいて東京の情報を得ることは容易です。しかし、小野さんが大学受験をする頃にはインターネットはありませんし、地方では親も東京のことを詳しく知らないことはざらですので、たとえば占い師に巧みに7万円もする印鑑を買わされてしまいます。また、東京で体を壊しそうになりながら働くなど、東京が嫌だと思いつつもそこにいるという、孤独な生活を経験しています。

小野さんのエッセイを引用します。大学に入ったときのこと。

二浪して、やっと美大の彫刻科に入学した。しかし最初の授業で頭像を作りながら、ボクは彫刻にこれっぽっちも興味がないことに気がついてしまった。(24ページ)

もしかすると、みなさんの中にも大学に入って、場合によっては苦労して入ったのに、授業に全く興味を持ってない、という方もいる

かもしれません。

もうひとつ、東京の会社に就職してからの話を紹介しましょう。

ボクは(省略)東京の片隅にいて、満員電車に乗って新宿にある会社で働いていた。仕事はテレホンオペレーターだった。週5日、1日8時間働いたけど、家賃と光熱費と携帯電話代と国民年金を毎月払うと、週末に映画にも行けなくらいしかお金は残らなかった。

お金がない人間にとって東京はとても辛い。これだけ店があるのに、どこにも入れない。そうすると付き合いもできず、孤立する。消費が満足にできない自分が、不完全な存在のように感じてくる。切り詰めれば切る詰めるほど、東京の街のなかで自分の存在が薄くなっていき、人ごみのなかでボクは寂しさに心を食われてしまいそうだった。四面楚歌というか、絶望というか、この状態からの出口があるのかも分からない状態が続く(省略)(66ページ)

さて、このように東京の生活に行き詰まりを感じる小野さんが、この本の後半ではアムステルダムに旅立ちます。

## アムステルダムへ

小野さんは会社員として閉塞感を感じながら生活をしていたようですが、そのなかで、写真家として賞をとり、1年間世界中を旅して作品を制作する機会を得ます。そして、アムステルダムに出会い、住みたいと思います。その後、芸術家の海外研修に出される助

成金を得て、アムステルダムに移住します。

アムステルダムという街を少しここで紹介をしておきましょう。アムステルダムは海だったところを干拓して陸地としていて、街のなかにも運河があります。レンガ造りの建物も多く、レンガの建物と水が、非常に美しい街並みを形成しています。夜はライトが水面に反射して、昼とは違った美しい風景となります。

アムステルダムは、移民の多い街としても知られています。人口の半分以上が外国にルーツをもつ人たちといます。教育制度は日本とは異なり、「宿題がない」「テストがない」そうです。また、大学は学費が無料です。なお注意事項としては、今の話は国内というか EU 内の話で、日本からの留学生は無料ではありません。そして、文化・芸術も豊かで、アーティストも多く住んでいるようです。

小野さんは、こうしたアムステルダムを「自由の空気が流れている」(206 ページ)、「ふと岡山からここまでの間、ずっと肩に力が入っていたことに気づいた。そしてアムステルダムが、ボクの方からそっと力を抜いてくれるのを感じる」(207 ページ)と表現します。本の後半では、小野さんが穏やかに生活をしている日記が掲載されています。

私もアムステルダムに行ったことがあります。私は大学院生のときに、学会の発表でアムステルダムに寄りました。観光客として行ったので表面的なことしか分かりませんが、外国人や言語が不自由な人にも優しい印象を受けました。また、オランダ全般にいえることかもしれませんが、日本の都市部のように、お店がたくさんあって便利という感じではなく、週末は閉まってしまう店もあるとい

うことで、長時間労働と消費による豊かさとは異なる、質素ななかにある豊かさを感じました。

## この本から得られるもの

この本から得られるものについて、私はキャリアの研究をしていますので、キャリアの転機点から 2 点述べたいと思います。

ひとつめは、「したいことをやめない」ことの重要性です。小野さん自身はほとんど触れていませんでしたが、東京での仕事に消耗するなかでも写真を撮り、コンテストや助成金に出すことを辞めていません。それは、積極的に頑張って努力したものかもしれませんが、消極的にやらずにはいられなかったことなのかもしれません。ですが、そうした自分の気持ちを押さえることなく続ける。そして、自分のなかにとどめず、発表する。それが小野さんが東京を脱出し、アムステルダムでの穏やかな生活のきっかけとなります。

10 代後半から 20 代の頃というのは、キラキラとしたものや、若さがあふれる力強いものとして描かれることも少なくありません。ですが、職業や家庭などが確立しておらず、むしろそれらを形成するための模索をする時期でもありますので、葛藤が多いものでもあります。そうしたなかで、自分がしたいと思うことを辞めないこと。これは、強い目標はなくてもよいのです。趣味で全くかまいません。辞めずにはいられないと思うことを辞めないこと。これが人生を彩るものになるのです。

ふたつめは、「合わないなら、場を変える」ことの重要性です。小野さんがこの本の前半で書いていたように、頑張っても合わないとい

ということがあります。そうしたなかで、場所を変えるということはなかなか自分では思いつかなかったり、選択にふみきれなかったりします。ですが、変化を喜んで受け入れ、今の合わない場から離れることが、新たな道を切り開くきっかけとなりうるのです。

もしみなさんが、今あるいはこれから葛藤に直面することがあれば、それは何もあなただけのものではないかもしれません。こんな

風になるなんておかしいと自分の気持ちに蓋をする必要は全くないのです。そして、したいことをやめないこと、そして合わない場を変えるということを試みてみるとよいかもかもしれません。

よければ、この本を手にとってください。  
『世界は小さな祝祭であふれている』でした。  
(社会学部教授)

2025. 11. 12 (水)

## 人とわかり会えるための論理

清水 裕 士

「大切な一冊」ということで本を紹介するという事なんですけど、なかなか紹介する本を思いつかなかったので、僕の好きな本をお話して、「本を読む」ということについてちょっとお話しできればと思います。結構、本って読むのが面倒くさくてですね。僕は全然「読書少年」ではなくて、今はもちろん研究者なので、本をいっぱい持ってはいるんですけども、家に帰ってソファーに座ってYouTubeのショート動画を垂れ流しながら、だいたい寝落ちしているっていう、そんな生活を送っていて。皆さんも、もしかしたら似たような感じかもしれませんけれども、本を読むというのは、やはり読むのが時間がかかりますし、最近は映画とかもゼミ生に聞いてみると、1.5倍速でドラマを見たりとか、そういう人もいたりして。アニメとか、みんなが見ているからとりあえず速再生する、みたいなことも結構あります。僕自身も何か映画を見るのが億劫な人間でして、2時間拘束されるというのがあんまり得意じゃなくて。そういう意味では、作品というのをばっちり見るというのは、それなりにやっぱり大変だなと思ったりします。

そういう中で、このまま「本は読まない」という話で終わるのもなんなので、ここからは「本を読む」ということについてお話しし

ようと思います。僕自身、映画を見ようかなと思うときは、やはり2時間見るとなるとそれなりに覚悟を決めないといけないと思って、ものすごい時間をかけて探してしまうんです。その結果、映画を何見るか選ぶだけで2時間ぐらいかかってしまうこともよくあって、「本末転倒だな」と思うんですけども。皆さんも、いざ「本を読みましょう」と言われた時に、何を読めばいいのかというのは難しい問題だと思います。

「間違っていた」哲学書、論理哲学論考との出会い

僕自身が「大学にちゃんと行こう」「研究者を目指そう」と思ったのは、大学3年生ぐらいの時でした。その頃、先輩の影響もあって哲学書を読もうと思ったんです。心理学と哲学は遠いようで近い関係にあるのですが、実際に哲学書をバリバリ読んでいますという人は実はあまり多くはありません。ただ、「哲学書を読むのってかっこいいよね」という憧れみたいなものがありまして、とりあえず、先輩から「ウィトゲンシュタイン」という哲学者がいると聞いて、「ほほう」と思い、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』という本を手にとってみたのですが、一

読んで何も分からなくてすぐにやめようと思いました。読むのを諦めてふらふらと本屋に行くと、ちょうど野矢茂樹さんという哲学者の本で、『ウィトゲンシュタインの「論理哲学論考」を読む』という本があったんです。「お、来た、これだ!」と思って。しかもそれが新刊で平積みされていたので、「これはまだ先輩も読んでないだろう」と思ったんです。マルクスの『資本論』の解説書のように、「〇〇を読む」といったタイトルの本は他にもあって、そういう本から入るのも格好いいな、という勝手なイメージもあって買ってみました。これが、僕が初めて買った哲学書でした。『論理哲学論考』自体は意味が分からない本だったんですけど、この本はすらすら読みました。野矢茂樹さんの読みやすいスタイルというか、書き口の良さもあって、非常に分かりやすく結構読めたんです。

もともと『論理哲学論考』というのは、始めからすごい格好いい本なんです。「世界とは物の総体ではなく、事実の総体である」という文から始まるんです。何かめっちゃめっちゃ格好いいわけです。でも、何言っているか分からない感じがすごくあると思うんですけども、そういう本なんです。「格好いいな」と思って読んでいたんですけど、よく言われていることは——僕も読む前には知っていたんですけど——ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は「間違えている」というのが通説の本なんです。間違えているのになんでこんな人気なんだろう、というのはとても不思議でした。実際この本を読んでみると、実際にどこが間違いであるかが書いてあります。書いてあるんですけども、「本質的な間違いでは実はないよね」というところで、実は本

全体の主張自体は「あり」だねって感じではあるんですが、明らかに、確かに読んでいると、この本は何か違うぞという感じが分かります。

そういう本って哲学にあるんだ、というのはまず大きな発見でした。哲学って「間違えている本」があるっていう感覚がなくて。当時は学部生だったので、哲学者が好きなのを言っているイメージがあったわけです。「ああ、この人はこんなことを言っている」「この人はこんなことを言っている」と。もちろんいろいろ厳密に書いているんでしょうけど、「間違えている本」というのがあるというのがとても新鮮でした。で、なんで『論理哲学論考』が間違えていると言われているかというと、厳密に書いているからなんです。論理的にめっちゃめっちゃ厳密に書いています。論理哲学なのでそうなんですけれども、数学の本かのように厳密に書いています。ただ、その主張自体もやっぱり今の観点から言うといくつか間違えているところもあるとは思いますが、その主張の間違いではなくて、厳密に書いてあるがゆえに、はっきり何が書いているかがある程度分かるわけです。だから、「違うんじゃない?」ってことがはっきり分かる、っていうふうな側面もあるのかなと思います。皆さんに『論理哲学論考』を読んでほしいと思っているわけではなくて——是非興味あれば読んでほしいですけど——この本を読んでほしいという紹介ではなくて、皆さんにお伝えしたいのは、本を読むときに一つは「かっこいい」というのは大きいモチベーションかなと思います。やっぱり読んで「格好いいな」とか——僕は哲学が専門ではないので「哲学をやれ」と言っているわけではないんですけども——「こんなかっこ

いいことしたいな」というようなことを一つのきっかけにする、というのが大きなと思います。僕も、映画やアニメを観るのにすごく時間をかけて選んでいますけど、やっぱり自分にとって響くようなものっていうのは、ある種の「格好良さ」みたいなものがあると思うので。

### 論理は体験を共有することができる

もう一つ、お伝えしたいメッセージなんですけども、『論理哲学論考』は、その名の通り「論理」についての本なんですけれども、最近、僕の研究を通して思うのは、この論理ってというのがすごく大事で、学問においてかなり本質的なものだなと。「そんなこと言われなくても分かるよ」と思うかもしれませんが、改めてそう感じています。先ほど言ったように、『論理哲学論考』はかなり厳密に書いているので、「間違えている」と言われているわけです。逆に言うと、ふわふわ書いていると、間違えているのかどうかよく分からないわけです。我々が普段、日常生活で論理的にしゃべっているかという、全く論理的にはしゃべっていないわけです。多分皆さんも、ゼミや演習とかで、「いや、それは何言っているかよく分からないよ」と先生に言われたり、「何書いているか分からない」と言われたりするともあると思います。

でも、心理学をやっていると思うんですけども、我々は実は論理的にしか考えられないんです。じゃあ何で論理的にしかものを考えられないのに——考えるというのはかなり論理的なんですけれども——何で論理的にしゃべれないのか、書けないのか。実は我々が友達や家族としゃべる時に、論理的じゃない

会話をするのは、多くの前提を共有しているからだと思います。どういうことかという、例えば「こうだよな」と言ったときに論理の飛躍があるんですけど、その飛躍は読み解いてみると、かなり多くの前提を共有しているから、そこを飛ばせるわけです。逆に、例えばゼミの先生に言ったときに「これ分からないよ」と言われるのは、多分皆さんが暗に仮定していることが明示的に書いてないから、分からないわけです。

なので、論理に注目することによって、実は我々が体験してないこと、あるいは共有してない体験が何なのかということが結構よく分かるな、という気がします。社会学も社会心理学もそうなんですけども、いろんな言葉を見つけるわけです。例えば、マイノリティの人たちがどんなことを考えているのか。我々が体験をかなりの部分共有していないところもあると思うんですけど、「これはこうでしょう」みたいな前提を我々は知らない。でも、それをたくさん経験している人がいるわけです。そういう人の体験を共有するにはどうしたらいいかという、——もちろん体験すればいいんですけど、それができない場合は——「言葉と論理の力」を使う。これが、結構大きな論理の機能、役割なんじゃないかなと思うわけです。なので、学問というものを考えるときに、我々は「感情でしゃべっちゃいけないよ」とか言うわけですけど、何で学問というのがそういう感情とかではなくて——感情ってどういうことかという自分しか経験してないことですから——それを使うんじゃないかと、論理を使うというのは、共有できない体験というのを可視化するというのにすごく役に立つんじゃないかなと思います。

最近、ショート動画を見ていると、誰かが誰かを「論破」しているような動画もいっぱい出てくるわけです。論理っていうと、皆さんのイメージで「論破して優位に立つための道具」として語られることがいくつかあると思います。皆さん自身がそういうふうに使っているとは思っていませんが、ここで、もし論理というものが、我々が共有していない体験を可視化する、あるいは見えるようにすることに役に立つとするならば、やっぱり人のことをよりよく理解して、要は「優しくなるため」に使ってほしいなと思うわけです。ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は明らかに（読者には）優しくはなかったんですけども、優しくないからこそ「違うよね」ということがわかるわけです。ウィトゲンシュタインはその後、自分の論考が間違えていることに気づいて、後期ウィトゲンシュタインとして『哲学探究』という本を書いたわけなんですけれども、そこで随分優しくなっています。

### 人とわかり会えるための言葉に出会うために

我々がやっぱり何で論理的になるのか、何で学問をするのかというのは、そういう「分かり得ない人とどうやったら分かり合えるか」ということを知るための道具として、やはり学問というのを使ってほしいと思います。そのために、別に本じゃなくてもいいんです。言葉とか論理は学問が得意なので本が

いいと思うんですけども、僕はアニメとか小説——小説はあまり読まなくてアニメが結構好きなんですけれども——も結構豊富な言葉を教えてくれます。作家さんというのは、そういう世界を優しく可視化するような言葉を多く紡いでくれていると思うので、単純に僕みたいにソファに座って寝落ちするためには動画を見るだけじゃなくて、ぜひ皆さん、ほかの人に優しくなれる言葉とか、あるいは論理を身に付けることによって、何か人々に共有できるような能力をぜひこの大学で身につけてほしいなと思っています。

やはり「何を読むか」を選ぶのはすごく大変なので、まずは皆さん、ゼミとかで紹介された本を一回手に取ってみたいと思います。残念ながら、最初はたいてい合わないです。合わないんですけども、読んでいくと自分に合うようなものが分かってきます。その最初の一歩が、皆さんにとっての「大切な1冊」になるかなと思います。その本が、人に優しくなれるための本であると、うれしいなと思います。

僕は幸い1冊目で結構響いたので、格好いいなと思って『論理哲学論考』を読めるようになりました。ぜひ皆さんも、もしかしたら世界の見方が変わるような1冊が見つかることを僕も祈っております。その「大切な1冊」に出会うためには、やはり読んでいかないといけないので、ぜひ先生に勧められた本を積極的に読んでいってもらえればと思います。

(社会学部教授)

2025. 11. 13 (木)

## 誰かと読むという経験

村田 泰子

### はじめに——十代の頃の読書経験

少し前に打樋先生から、「大切な本」というテーマで話してくださいと声をかけていただきました。どの本について話そうか考える中で、自分の十代の頃の読書経験と、大学院生になってからの読書経験とでは、大きく変わったと感じていることに気づきました。

若い頃のわたしは、岡山の田舎で育った、本が好きで中高生でした。母の影響もあって、近代日本文学が好きで、高校生の頃は太宰治に夢中になりました。図書館で借りた太宰治全集を夜遅くまで読んでいて、残りのページが少なくなってくると、終わってしまうのが残念で、寂しく感じられたのを憶えています。

ところが年を重ねるにつれて、そのように没頭して、純粹に本を楽しむ機会は減っていききました。理由の一つは、仕事として本を読むようになったことです。本を読んでレポートを書く、授業のために内容を整理するなど、目的をもって読むようになると、「ただ楽しいから読む」という読書とは違ってきたのだと思います。

しかしその一方で、別の読み方の喜びも見つけました。今日はそのことについてお話します。

### イギリス留学中の経験——社会学との出会い

私はもともと学部生のときは英語を専門に学んでいて、大学三年生のときに一年間、交換留学生としてイギリスに留学しました。たまたま留学先で所属したのが社会学部で、最初は社会学の知識もほとんどないまま授業に出ることになりました。英語も十分に読めるわけではなく、とても苦労しました。

そのときの授業で、フランスの歴史家、ミシェル・フーコーの『監獄の誕生』（英語版 Discipline and Punish）を読むことになりました。社会学の基礎知識もないまま、フーコーを英語で読むのですから、読むのにゆうに一か月かかりました。一日数ページしか進まない日もありました。

そんなとき、同じように日本から来て、博士課程で勉強していたある先輩が、A4で数枚程度の、彼が作成したレジюмеをくれました。これがそのときのレジюмеです。フーコーを読むための手引きとして書かれたもので、「これは予備的な案内であり、正解の読み方を示すものではない。読みの可能性は読み手に開かれている」と書かれています。三十年近くたった今でも、そのレジюмеを大切

に取っているのは、当時このようなレジュメをもらったことが、よほど嬉しかったからだと思います。

### フーコー『監獄の誕生』

レジュメの内容を、少し紹介しましょう。この本は、近代的な監獄がどのように生まれたかを描いています。最初に出てくるのは、国王に反逆したダミアンという人物が、広場で公開処刑される場面です。ところが、その数十年後には、処罰の中心は監獄へと移ります。その変化について、通常は「人道的になったから残酷な刑罰をやめた」と説明されますが、フーコーは別の見方を示しました。監獄は、現代社会の管理の仕組みを象徴する装置だということです。有名なのが「パノプティコン」という構造です。中央の監視塔から、周囲の独房を一望できる仕組みで、囚人は見られていることは分かるけれど、いつ見られているかは分かりません。そのため、囚人は自らを律して規則正しく生活するようになります。少人数の監視で多くの人を管理できる、効率的な仕組みです。このように、本書は処罰の形が変わったことを通して、近代社会の管理のあり方を示しているのだということ、そのレジュメはわかりやすく教えてくれました。

さて、このとき私が嬉しかったのは、これでレポートが書ける！と思ったからだけではありません。社会学を学び始めたばかりの自分にとって、すでにその世界にいる先輩が、わたしのような若輩者のためにこのようなレジュメを作り、教え導いてくれたことは、ある意味、自分を「仲間」と認めてくれたような、そんな嬉しさがありました。それは、知

的世界への仲間入りを認められたような、そんな喜びであったと思います。

これが、わたしが誰かに助けられながら読んだ、最初の経験でした。そのレジュメは、それから何度も引越えをしましたが捨てられず、今もこうして手元にあります。

### 読書会がわたしを育ててくれた

その後、帰国して日本の大学院に進学し、読書会という形で本を読む経験を重ねました。現代の大学とは異なり、「学生同士で学びなさい」という方針だったため、院生同士で読書会をしました。最初は先輩が声をかけてくれ、参加させてもらいました。とても嬉しかったのを憶えています。その読書会では、マルクスやフーコー、フロイトなど、さまざまな本を読みました。毎回、誰かがレジュメづくりを担当し、ときには詳しい人を呼んで解説もしてもらいながら読みました。

正直に言えば、内容を十分理解できた本ばかりではありません。それでも、誰かと一緒に読むことで、自分一人では到底読み切ることができなかった大著の数々を、わからないなりに読み切ることができました。また、自分がわからないことは、多くの場合他の人もわかっておらず、そうしたことがらについて性急に答えを出すのではなく、ともにじっくり考えることの大切さも学びました。

### 関学の大学院生たちの読書会

関学に来てからも、他学部、他学部の壁を超えて、さまざまな教員や大学院生と読書会や勉強会をしてきたのは、そうした楽しい経験があったからだと思います。

最近の若い人たちは、本を読まなくなつた、読書会という文化も廃れたと言われたりしますが、関学の社会学研究科では、そうでもないようです。つい先日、博士課程の学生が、大学院進学を志す学生のために、アンソニー・ギデンズの『社会学』を読む会を開いていると聞きました。会を主宰する院生のかたに聞いたところ、「自分もむかし、そうやって先輩に教えてもらったから、今度は自分の番だと思ってやっています」とのことでした。その言葉に、とても感動しました。

今日は、十代の頃の一人で没頭する読書から、二十代以降の、教えられながら、また教え合いながら読む読書へと変わってきた経験についてお話ししました。本は一人で読むものでもあります、誰かと一緒に読むことで、そこに新しい意味や世界が開かれることもあります。みなさんも、これから出会う本や、誰かと分かち合う読書の時間を、大切にしてもらえたらと思います。

(社会学部教授)

2025. 11. 25 (火)

## 踏まれたら立ち上がらない

立石 裕二

はじめに

社会学部で学ぶ皆さんには、社会的な課題や身近な人間関係、流行、文化などに関心をもっている人が多いと思います。もちろんそうしたことを考えるのは重要ですが、今日お話ししたいのは、人間・社会について理解するヒントは、人間や社会について書かれた本の中だけにあるわけではないということです。

多くの高校では文系と理系のカリキュラムに分かれています。現実の世界はそういうふうに分断されていません。草花や昆虫、機械、天体など、どんな分野も私たちが生きる世界と地続きであり、その道を極めた人だからこそ見える「世の中のしくみ」や「生きる上でのヒント」があります。

そうした視点から、稲垣栄洋さんという植物学者が書かれた『雑草はなぜそこに生えているのか：弱さからの戦略』（ちくまプリマー新書、2018年）という本を紹介したいと思います。この本は一見すると植物学の話に見えますが、実は人間社会のあり方についても深く考えさせられる内容になっています。特に印象的だったのは、帯に書かれた「踏まれたら立ち上がらない」というフレーズでした。このシンプルな言葉は、雑草とい

う存在の本質を見事に表現していると思います。

雑草は強くない

皆さんは雑草についてどのようなイメージを持っていますか。おそらく「どこからともなく生え、何度抜いても復活する、生命力の強い植物」というイメージを持っていると思います。けれど、雑草は決して他の植物よりも「強い」わけではありません。むしろ「弱い」植物です。では、そのような弱い植物がなぜ生き残ることができるのか。それは、その弱さを逆手にとった生存戦略を持っているからです。

稲垣さんによると、植物の強さには三つの異なる種類があります。

一つ目は、「競争に強い」という強さです。他の植物との光や水の奪い合いに勝つ能力が高いということです。たとえば、背が高く枝葉を広げる樹木は、他の植物との日光の獲得競争に勝つことができます。この能力は、受験やスポーツの世界で勝つという意味での強さと似ています。

二つ目は、「ストレスに強い」という強さです。ほかの植物が生きられないような厳しい環境で生き抜く能力が高いということです。

す。サボテンや高山植物、高熱の温泉で生きられる植物などがこれに当たります。雑草もストレスに強そうに見えますが、実はそうではありません。人間がふだん暮らしているような比較的温和な環境でしか生きられません。

そして、三つ目が「攪乱に強い」という強さであり、これが雑草の特徴です。環境が急速に変わったとき、その変化に対応できる能力を指します。タンポポのような典型的な雑草は、背丈が低く、植物同士の競争では勝ち目がありません。しかし、人間の生活によってたえず攪乱を受ける環境では、この環境変化への対応力が最大の強みになります。

雑草の生存戦略は、「無理に競争しない」ことにあります。帯に書かれた「踏まれたら立ち上がらない」という言葉は、この戦略を端的に表しています。折れないように力をこめたり、無理に立ち上がったりとすると、さらに強い力で踏まれたときに折れて力尽きてしまいます。立ち上がらず、地面に低くはりつくことで、踏まれても折れずに生き延びる——それが雑草の知恵なのです。

## 人間によって定義される「雑草」

ここまで雑草の話をしてきましたが、そもそも雑草とは何でしょうか。本書では、「望まれないところに生える植物」と定義されています（16頁）。重要なのは、「望んでいないのは誰なのか」ということです。それは人間です。雑草という植物のカテゴリーがあるわけではなく、人間との関わりにおいて初めて「雑草」という概念が成立するのです。

私の専門である環境社会学や科学社会学では、人間と非人間（植物や動物、機械など）

との関係に注目します。特に、人間と自然が別々に存在しているのではなく、互いに混ざり合い、影響を与え合いながら存在しているという「ハイブリッドな関係」に注目します。雑草はまさに、そのようなハイブリッドな存在です。

しかし、だからといって人間と雑草の関係が「相思相愛」というわけではありません。人間は雑草のことを「望んでいない」のです。農家は田んぼに生える雑草を厄介者と考えますし、庭に雑草が生えれば誰もが除去したいと考えます。だからといって雑草が不要な存在というわけではありません。現在は農作物として重宝されている植物の多くも、元をたどれば人間社会の近くにある「雑草」のような存在だったわけです。このように、相互依存的でありながらも、必ずしも調和していない関係は、社会学的に見ても非常に興味深いものです。

## 雑草の価値と私たちへの示唆

さきほど一般的な雑草の定義を説明しましたが、稲垣さんは別の定義も示しています。「雑草とは、いまだその価値を見出されていない植物である」（18頁）。現在雑草として扱われている植物でも、決して役に立たないわけではなく、人間がまだその可能性に気づいていないだけとも言えます。今後、何らかの価値が発見されるかもしれません。雑草とされていた植物が、のちに医学的な有用性を発見される例もありますし、その逆に、かつては有用だった植物が今では厄介者とされることもあります（葛（くず）などが典型です）。

ここまで見てきたような「踏まれても立ち上がらない」「いまだその価値を見出されて

いない」といった雑草のあり方は、私たちが人間社会で生きる上でのヒントにもなりません。近年、あるべき生き方や考え方、仕事術、人間関係の築き方などを説く「自己啓発」本の出版が盛んです。そうした本も面白いですが、「どう生きるべきか」を正面切って書いた本は、時に重さを感じさせ、逃げ場がないように感じることもあるのではないかと思います。また、そのときどきの社会の風潮に左右されすぎのように感じることもあります。本書はあくまで雑草の話として書かれているため、気軽に読むことができます。それでいて、そこから得られる示唆は深いです。弱さをいかすこと、環境の変化に適應すること、多様性を保つことといった視点は、現代社会を生きる上でも大切なヒントになると思います。

### 社会の外にもヒントがある

人間社会や自分の生き方を考えるヒントは、狭い意味での「社会」の外にもたくさんあります。理系の研究、スポーツ、芸術——どんな分野にも、その道を極めた人だからこそ見える、世の中のしくみや生きる上での洞察があります。

皆さんの中には、子どもの頃は草花や昆虫を観察したり、天体を眺めたり、機械や乗り物に夢中になったりした人が多いのではないのでしょうか。しかし、成長するにつれて、理科に対する興味は薄れていきがちです。複雑な数式、受験勉強、高校での文理選択……。過

去の記憶から少し距離を置き、「理系っぽい」話にもう一度触れてみるのは、案外楽しいのではないかと思います。

実践的な観点からも、理系的なものを「食わず嫌い」しないことは大切です。「文系」だけ、あるいは逆に「理系」だけで成り立っている企業はほとんどありません。両方の要素を組み合わせると、はじめてビジネスとして成り立ちます。金融やマスコミのように一見「文系的」に見える業界でも、融資したり報道したりする対象の理解には文理を問わない知識が求められますし、自らのビジネスを支えるテクノロジーを理解し、その変化に適應する力は大きな強みになります。また、社会学部の卒業生の中には、メーカーに就職し、技術面も理解しながら活躍している先輩がたくさんいます。「理系っぽい」話にも関心を持つことで、皆さんの視野が広がり、将来の選択肢も増えると思います。

社会学部で学んでいく上で、このように一見関係のないジャンルの本を読むことは、回り道に見えるかもしれませんが、こうした「みちくさ」が意外なかたちで自分の研究テーマにつながってくることがあります。そのような間口の広さも、社会学の魅力の一つだと思います。世界を多角的に見る社会的なまなざしを広げる意味でも、本の帯や表紙に少しでも心を引かれたら、ぜひジャンルにとらわれず本を手にとってみてください。

(社会学部教授)

2025. 11. 27 (木)

## 異なる世界を共に生きる

—『ソロモンの指輪』に学ぶ他者理解—

森 久美子

ソロモンは三千の箴言を語り、その歌は千と五を数えた。レバノンの杉から、石垣に生えるヒソブに至る草木について論じ、獣や鳥、這うものや魚について語った。ソロモンの知恵を聞きつけたあらゆる国の王のもとから、その知恵を聞くこととあらゆる民がやって来た。(列王記上 5: 12-14)

### 動物行動学者、ローレンツ

今月のテーマは「大切な一冊」ということですので、私が学生の頃に読み、今も愛着を持っている本についてご紹介させていただきます。私が選んだのは、コンラート・ローレンツの『ソロモンの指輪』です。

著者のコンラート・ローレンツはエソロジー(動物行動学, 比較行動学)という学問分野を切り拓いた人で、1973年にノーベル生理学・医学賞を授与されています。この本は、彼が自身の自宅で様々な動物たちと共に暮らし、観察した記録を、ユーモラスなエッセイ形式でまとめたものです。タイトルの「ソロモン」は、先ほど読んでいただいた、旧約聖書に登場するソロモン王を指しています。伝承では、ソロモン王は魔法の指輪を使って、獣や鳥や魚や地を這うものたちと会話をしたと言われているそうです。ローレンツはこれに対して、「私は、自分のよく知っている動物となら、魔法の指輪などなくても話ができる」と本書の中で書いています。実

際、この本には、ローレンツが体当たりで動物たちとコミュニケーションを紡ぐ様子が生き生きと描かれています。

ローレンツの動物とのかかわり方は、科学的であると同時にとてもユーモラスです。その一つに、鳥の雛が持つ「インプリンティング」、つまり「生まれて最初に目にした動くものを、親だと思ってついて回る特性」に関するエピソードがあります。

インプリンティングはどんな鳥にも無条件に成立するわけではありません。ローレンツはいろんな種類の鳥のインプリンティングを調べる中で、ハイロガンの雛では容易にインプリンティングが成立するのに、マガモの雛ではそうではないことに気づきます。マガモの場合、最初に目にしたのが人間や種類の違うトルコガモだと、雛たちはついて回るどころか一目散に逃げていってしまうのです。では、マガモは本当の親にしかインプリンティングが成立しないのかということ、そうでもありません。初めて見るのがアヒルだと、マ

ガモたちはアヒルを親のようにして歩いてきたのだそうです。

この違いはなぜでしょうか。ローレンツは、マガモの場合、先を歩く親鳥が特有の鳴き声を出す必要があるのではないかと気づきました。試しに、ふ化直後の雛たちにマガモの声真似で「グワツグワツ」と半日ほど呼びかけたところ、雛たちは彼を警戒しなくなり、彼が歩くと後ろをついてくるようになりました。マガモとアヒルと人間では見た目はずいぶん違いますが、同じような声で語りかければみな親と同等にみなされたというわけです。

ところが、ここからが大変でした。ローレンツは最初、腰をかかめてマガモの声を真似ていたのですが、ちょっと体勢が辛くなって立ち上がったところ、雛たちは母鴨がいなくなった時と同じように辺りを見回してか細い泣き声を出すのだそうです。声がそんなに上の方から聞こえてくるのでは、もう彼らには親だと認識できないのです。さらに、またローレンツが声を出すのをやめても、やっぱり同じように泣き出します。それでローレンツは、仕方なくずっと腰をかかめたままマガモの鳴きまねをしながら庭を歩き回る羽目になってしまい、近所を歩く人から変な目で見られたというほえましいエピソードが紹介されています。

### 動物のコミュニケーションと言語

このエピソード以外にも、この本には、ローレンツが動物の発するシグナルの意味を突き止めていくプロセスがたくさん載っています。一方で、ローレンツは当時、「動物も言語を持つ」という考えをはっきりと否定し

ています。動物たちのシグナル発信には、文法や、仲間に影響を与えようとする意識的な目的はないとして、ヒトの言語のようなものとして理解しようとする「擬人化」を強く批判しました。

ところが近年、ローレンツの「動物は言語を持たない」という見解を覆すような、新しい発見が次々と現れています。その代表が、東京大学の鈴木俊貴さんのシジュウカラの研究です。シジュウカラは私たちのキャンパスでもよく見かけるかわいらしい小鳥ですが、鈴木さんは、この鳥がたとえば「ヘビ」や「集まれ」「警戒せよ」とような異なる意味を持つ音を組み合わせる「ヘビだ、集まれ、警戒せよ」のように自由に意味を作り出していることを発見しました。

さらに重要なのは、同じ音の組み合わせでも順序を入れ替えると仲間の反応が変わり、要素の順序が意味を作るという、人間の言語に共通した文法構造があることも指摘しています。そして、その文法はシジュウカラだけでなく、ヤマガラ（これもたまたまキャンパスで見かけることのできる小鳥です）など他の種の鳥にも理解され、行動に影響を与えていることもわかってきました。

ローレンツの時代には、動物のシグナルは、文法も他の個体への働きかけという意味も持たず、「特定の生理状態を示す信号」とみなされていました。でも新しい研究で、それらは実は言語的特性を持っている可能性が見えてきました。同様の発見は、鳥だけでなく、霊長類やゾウなどでも報告され始めています。鈴木さんは、動物たちの中にはそれぞれの言語を持つものが他にもいるはずで、ヒトの言語も動物の言葉のひとつと位置付けて進化の過程の中で研究できる日が来ると述べ

ています。

## 同じ時空間を共有しながら違う世界を生きる

私は、自分では動物を対象とした研究をしたことはありませんが、動物の研究をしている方のお話を聞くのは大好きです。その理由は、ヒトという枠をはめられて生きている自分とは異なる世界のあり様を垣間見せてもらい、そこにワクワクできるからだと思います。動物とヒトとでは感覚器官も違い、見えるものも聞こえるものも全く違います。同じ時空間にいても、知覚する世界、生きている世界はまったく違っているわけです。私がこの『ソロモンの指輪』という本を、今なお大切な一冊として挙げるのは、まさにこの「異なる世界の見方」に共感するからです。

ローレンツと鈴木さんの研究は、動物が言

語を持つかどうかという点では逆の結論になっていますが、動物に対して擬人化した見方は一切せず、その動物の視点から理解しようとしている点は完全に共通しています。彼らの研究は、違う世界を生きるものへのまなざしについて、ひとつの教訓を与えてくれます。それは、対象に関心を持ち、先入観から自由に観察を続けることこそが、異なる世界を生きる相手の理解につながるということです。それは動物だけでなく、文化や価値観の異なる他者であっても同じではないかと思えます。

『ソロモンの指輪』は、私たちに「異なる存在を理解するための謙虚な心と、科学的な見方」を与えてくれる、素敵な一冊だと思います。皆さんももしよかったら読んでみてください。

(社会学部教授)



## V. クリスマスを前にして

2025. 12. 3 (水)

## 関西学院のクリスマス——原田の森時代の資料から

赤江達也

いま、学院史編纂室の仕事を担当しています。関西学院の学院史編纂室は、時計台の一階にある、学校アーカイブズです。日本キリスト教史と関西学院史への関心から、「関西学院のクリスマス」についてすこし調べたこととお話しします。

### キリスト教主義学校のクリスマス——教会と教会外の間

キリスト教主義学校のクリスマスはどう考えるか。クリスマスは、イエス・キリストの生誕を祝う教会の行事です。幕末・明治初期から、神戸居留地や教会において宣教師や信徒たちによって信仰的な行事として「教会のクリスマス」が祝われてきました。

その一方で、日本では「教会の外」でもクリスマスが祝われてきました。デパートが典型ですが、そうした商業化された祝祭イベントを「教会外のクリスマス」と呼ぶことができます。それは日露戦争（1904-05）後に大都市の繁華な場所ではじまり、アジア・太平洋戦争期には縮小しますが、戦後の高度成長や消費社会化のなかで広まりました。

「教会のクリスマス」と「教会外のクリスマス」という区別をおいてみると、キリスト教主義学校の独特な位置がはっきりしてきま

す。キリスト教主義学校は、教会と密接に関係しながら、教会とは区別された場です。このような「教会と教会外の間領域」としてのキリスト教主義学校における、クリスマスの歴史について考えてみたいと思います。

### 『村上博輔日記抄』にみる 20 世紀初頭のクリスマス

学院史編纂室で尋ねてみたところ、関西学院のクリスマスについてはまとまった研究がなく、明治期については資料が少ない、とのことでした。そして、比較的早い時期の資料として、村上博輔（1865-1926）の日記を教えていただきました。

村上博輔は、関西学院の創立者 W. R. ランバスから洗礼を受けたクリスチャンで、南メソヂスト監督教会の伝道師、広島の中学院を経て、1903（明治 36）年に関西学院の教員になります。普通学部で国語と漢文を担当し、後には文学部教授となっています。

村上博輔の事績については、『関西学院事典』に次の記載があります。

〔第 2 代院長〕吉岡美国および学院の初期の教職員一般に見られるアメリカ一辺倒の風潮を痛烈に批判した。1905 年

5月3日、朝のチャペルで普通学部普通科の認定問題を取り上げた村上是、08年12月には蘆田慶治とともに文部省との最終交渉を行うなど認定の取得のために活躍した。

〔村上博輔〕『関西学院事典（増補改訂版）』関西学院、2014年）

ここでは、2つのことが指摘されています。第一に、関西学院の「アメリカー辺倒の風潮を痛烈に批判」した、ということです。村上是骨がある人物として知られ、尊敬されてきました。そして、第二に、関西学院の「認定の取得のために活躍した」ということです。これは文部省訓令第12号（1899年）の問題を指しています。明治国家が学校を認定する条件を示した訓令第12号には、宗教的儀式的禁止がふくまれていました。つまり、キリスト教主義学校に対する統制であったわけです。

これを受け入れるかどうかは、関西学院にとっても大問題でした。関西学院は最終的には1909年に認定を受けるのですが、10年間かかっています。これは他の私立学校、キリスト教主義学校よりもかなり遅く、関西学院は抵抗していたわけですが、学校が発展していくためには認定が必要である。そうした状況で、先駆的に問題提起し、認定の取得のために活躍したのが村上博輔でした。

### ① クリスマスにおける「贈物」問題——「俗メテテ面白クナシ」

1903（明治36）年、関西学院に着任して最初のクリスマスを迎えた村上是、学生たちの集会の「盛会」ぶりや、「贈物」や「福引」について記しています。

十二月二十三日 晴 四年ノ試験ヲ行フ。〔……〕夜関西学院クリスマス学生的集会例ノ如シ盛会。芦田ヨリ饅頭、窪田氏ヨリ手拭、石鯨其他小児等へ贈物ヲモラフ。福引ニテ予コンニヤク、〔次男〕謙介麩、〔次女〕そのえ〔園枝〕箒、細君火かきヲ取ル。田舎ニテハ近来クリスマスニ贈物ヲ行ハズ。始テ之ヲ廃セシトキハ甚ダ寂シク感ジタリシガ止テ見レバ又有ルノガ俗メテテ面白クナシ。

〔村上博輔日記抄 一〕『関西学院史紀要』第7号、2001年、177頁）

興味深いのは、村上が「贈物」に批判的だということです。饅頭・手拭・石鯨その他の贈物をもらい、福引で村上和と家族は麩・箒・火かきを取ります。それに続けて、「田舎」ではクリスマスに贈物を行わなくなった、というのですが、これはおそらく広島の前任校のことだと思われます。贈物を廃止したときは寂しく感じたが、止めてみると「俗メテテ面白クナシ」——クリスマスの贈物は、俗っぽくておもしろくない——というのです。「アメリカー辺倒の風潮」を批判した村上是、クリスマスの贈物にも批判的でした。

翌1904（明治37）年の日記では、村上和は次のように記しています。

十二月二十四日 土 曇 朝九時関西学院クリスマス。真鍋氏感話（キリストノ容姿）及生徒ノ路加伝暗誦アリシノミ。集マリタル金ヲ以テ米及メザシヲ添へ、西灘村軍人家族ノ貧キモノニ送ル。

〔村上博輔日記抄 二〕『関西学院史紀要』第8号、2002年、158頁）

この年の「関西学院クリスマス」は、感話と聖書の暗唱だけで、贈物や福引は言及されていません。そして、集めたお金を持って、お米とメザンを添えて、西灘村の軍人家族の貧しき者に贈った、というわけです。この年は日露戦争が始まっており、村上の主張によるものかわかりませんが贈物が縮小します。そのかわりに、困窮する軍人家族にお金と食料を寄付しており、クリスマスに救貧活動に力を入れていく様子が見えます。

## ② 学校行事と宗教行事の区別——終業後のクリスマス祝会

もうひとつ指摘しておきたいのは、この時期、次第に学校行事と宗教行事を区別していく傾向が見られるということです。

1906（明治39）年のクリスマスについて、村上は次のように書いています。

十二月二十二日 土 晴 試験今日済ム、午後クリスマス及終業式。日野原〔善輔〕氏ノベチレヘムヲ<sup>（とびら）</sup>訪ヒタル談アリ。面白カリキ。  
（「村上博輔日記抄 四」『関西学院史紀要』第10号、2004年、128頁）

午前に試験があり、午後にクリスマスと終業式が行われています。同日の関学のクリスマス祝会に関する他の雑誌記事によれば、午前の試験の終了とともに、ひとまず「校を閉ぢ」、午後に「閉校式を兼ね」クリスマス祝会が行われた、と記されています。

去る廿二日学期試験終了と共に一と先ず校を閉ぢ午後二時より礼拝堂にて閉校式を兼ねクリスマス祝会を執行せり、吉岡

院長の淳々たる訓戒に次て大阪西部美以教会牧師日野原善輔氏の実物教示聖地旅行談ありき、当日は神学部、高等科、普通科、の来春卒業せらるべき人々委員となり諸事に斡旋せられたり、尚吉岡院長、ニウトン、ウエインライト両博士の写真を一人づゝ挿入せる本館、礼拝堂、森林の三枚一組の絵端書を贈与せられたり（「関西学院」欄、『護教』第807号、1907（明治40）年1月12日、11頁）（「村上博輔日記抄 四」『関西学院史紀要』第10号、2004年、142頁、注44から再引用）

この時期以降、たとえば『関西学報』の「日誌」欄、1911（明治44）年12月23日の項では、午前に終業式があり「終了後職員の懇話會あり」と記されていますが、クリスマスへの言及がありません（「院内記事」『関西学報』第14号、1912年7月8日、55頁）。

クリスマスへの言及がないことは、関西学院でクリスマスが祝われていなかったことを意味してはなりません。1914（大正3）年、基督教青年会の記録からは、就業式の後に、青年会でクリスマス祝会が持たれていたことがわかります。

十二月二十二日終業式終了後倶楽部室にて青年會主催の聖誕祭を催す／出席者約卅五名盛會ナリキ、  
（関西学院キリスト教主義教育研究室編『関西学院青年会記録』1980年、79頁）

こうした箇所から、学校行事と宗教行事を区別する傾向が強まっていることがわかりま

す。学校を閉じた後（終業式後）、あるいは終業式を兼ねて、といったように、学校行事とクリスマスを時間的に区別する意識がみられます。そして制度的には学校行事の外で祝うようになっていきます。たとえば、学生寮、キリスト教青年会、神戸美<sup>み</sup>以教会（後の神戸栄光教会）といった場所でクリスマスが祝われました。

文部省訓令第12号問題への対応がある中で、学校行事から表面上（文献資料上）は宗教色を薄めていくのです。実際にはこの時期にも、学校のなかでクリスマス関連行事を行っていたと思われるが、それをあまり外に見せないようになっています。他方、学生寮、青年会、教会などでのクリスマス祝会は資料上でも観察されるのです。

### 教会の行事としてのクリスマス——関西学院教会の設立（1915）以降

関西学院のクリスマスの主要な舞台になっていくのが、1915年に成立する関西学院教会です。1909年、関西学院は、文部大臣より認定を得ています（「中学校ト同等以上」）。1910年には、それまでのアメリカ・南メソヂスト監督教会に加え、カナダ・メソヂスト教会が学校経営に共同参加します。こうして1910年代に、関西学院は躍進していきます。生徒数も急増し、1900年代の200人台から1910年代には600人台になっています。

そうしたなかで、1915（大正4）年に関西学院教会が設立されます。同年11月14日に「クリスマス委員会」が設置され、「全学、教会合同でクリスマスを迎えること」とされます（長久清ほか編『関西学院教会五

十年史』関西学院教会、1966年、15頁）。こうして、関西学院教会において、関西学院のクリスマス祝会が開催されます。

以下の図は、1916（大正5）年のクリスマス祝会のプログラムです。

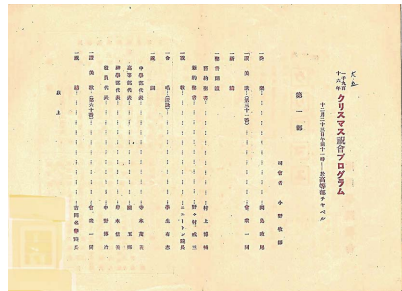
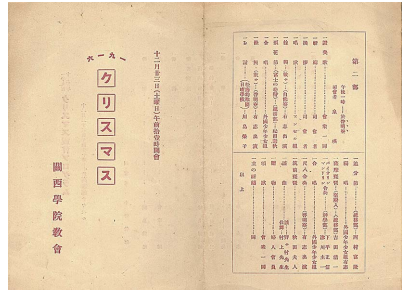


図 関西学院教会「一九一六 クリスマス祝会プログラム」（学院史編纂室蔵）

このプログラムからは、クリスマス祝会が二部構成で盛大に祝われている様子を知ることができます。第一部では、中学部、高等部、神学部、役員<sup>役員</sup>の代表が挨拶しています。その意味では、実質的に関西学院「全学」の行事なのですが、それが「教会」の行事として「合同」で行われています。関西学院教会で教会行事としてクリスマス祝会に関西学院「全学」の関係者が参加する、という形式になっているのです。

戦前に学校として認定を維持するために、表面上は宗教色を薄め、しかし学校が教会を

設立し、そこでクリスマス祝っていく、ということが起こっていました。国家による宗教の統制の中で、キリスト教主義学校としての関西学院がどのように対応していったのか、ということの一端が見えてくるのではないのでしょうか。

### 学校行事としてのクリスマス——戦後における再開

それでは、戦後には、関西学院のクリスマスはどのようになっていったのでしょうか。

1949（昭和24）年12月には「メサイア」のコンサートが開催され、翌年には「宗教活動委員会」が発足します。そして1956（昭和31）年12月には、「教職員クリスマス礼拝・祝会」が開始しています（「宗教センター・宗教活動委員会年譜」）。こうして、戦後、学校行事としてのクリスマス礼拝が再開され、現在にまで続く、関西学院のクリスマスが行われるようになった、ということがわかります。

今回は、関西学院のクリスマスの歴史を仮説的に概観してみたわけですが、今後さらに調査を進めてみたいと思っています。

### 付記

本稿の資料調査では、学院史編纂室の辻美己子氏にご助力いただきました。記して感謝いたします。

### 参考文献

井上琢吾「村上博輔日記抄（一一一四）」『関西学院史紀要』第7-10, 12-21号, 2001-2004, 2006-2015年

『関西学院事典（増補改訂版）』関西学院, 2014年

『関西学院百年史』（全4冊+索引）関西学院, 1994-1999年

関西学院キリスト教主義教育研究室編『関西学院青年会記録』1980年

長久清ほか編『関西学院教会五十年史』関西学院教会, 1966年

\*

赤江達也「キリスト教はどのように受容されているのか」岩田文昭・碧海寿広編『知っておきたい日本の宗教』ミネルヴァ書房, 2020年

堀井憲一郎『愛と狂瀾のメリークリスマス——なぜ異教徒の祭典が日本化したのか』講談社現代新書, 2017年

クラハト, クラウス・タテノクラハト, 克美『クリスマス——どうやって日本に定着したか』角川書店, 1999年

嶺重淑・波部雄一郎編『よくわかるクリスマス』教文館, 2014年

鈴木範久『日本キリスト教史——年表で読む』教文館, 2017年

（社会学部教授）

2025. 12. 9 (火)

## メリー・クリスマス鱒

寺 沢 拓 敬

### クリスマスと鮭／サーモン

クリスマスディナーといえば、七面鳥が有名ですよね。日本ではチキンもよく食べられます。ところが最近、日本では「サケ」や「サーモン」も、新しいクリスマス料理として扱われ始めています。これは一部のインターネット・ミームがきっかけです。

ウィキペディアの日本語版と英語版にも、「クリスマスにはシャケを食え」という項目が立っています。特撮ドラマ『ルパンレンジャー VS パトレンジャー』に登場した「サーモン・シャケキスタンチン」というキャラクターのセリフが元になったミームです。さらに農林水産省も、コロナ禍の2020年のクリスマスに、「サーモンでクリスマス鱒（ます）」というダジャレのツイートをして話題になりました。まだムーブメントとしてはごく下火だとは思いますが、ひょっとすると、遠くない未来の日本では、サーモンが、クリスマスの代名詞になっているかもしれません。

### サーモンをめぐる不思議

サーモン関連で、私の故郷・長野県の話に移ります。長野には「信州サーモン」という

ご当地グルメがあります。私は、長野を訪れた方に会うと、必ずこう聞きます。

「信州サーモンを食べましたか？」

「はい、美味しかったです」と返ってきたら、私は「まってました」とばかりに、「実は、信州サーモンって、中身はニジマスなんですよ」と伝えます。

そうです、信州サーモンは実は、ニジマスニジマスを長野県の水産試験場が品種改良した養殖魚なんです。でも、そんなことを聞いても、多くの人は簡単には納得しません。

「いやいや、マスとは違って、ちゃんとサーモンの赤い色をしましたよ」と反論してきます。

そうなんです。信州サーモンは紛れもなく「サーモン」ピンクです。ニジマスの白身とはぜんぜん違います。

じつは、このサーモンピンク色の種明かしは、エサに含まれる色素です。そもそもサケという魚は、本来は白身です。自然界にいるサケは、エビやカニなどの赤い色素を持つ生物を食べるために、身が赤く染まっていくのです。養殖魚の信州サーモンは、養殖池で赤い色素の餌を与えられているので、サーモンピンクになるわけです。

つまり私たちが「サケは赤身」「マスは白身」と思い込んでいるのは、色にだまされて

いる部分が大きいです。

## 英語で何と呼ぶ？

ところで、私は英語も教えているので、英語の話に移りましょう。サーモンの日本語訳はなんでしょうか。英和辞典では、サケ=salmonと書かれています。ついでにいうと、マス=troutです。でも、これは厳密には正しくありません。たとえば英語で“trout”とレシピ検索をすると、赤い身の魚の写真ばかり出てきます。ここで、魚の名前を日本語と英語で具体的に見ていきましょう。

- ・ニジマスは英語で“rainbow trout”。
- ・シューベルトの「マス」のモデルになった魚は“brown trout”。和名では茶マス。
- ・英語では“king salmon”と呼ばれる魚は、日本語では「マスノスケ」。
- ・北海道阿寒湖にいるヒメマス（人気漫画『ゴールデンカムイ』にも少しだけ出てきますね）は、北米では“kokanee salmon”。
- ・もっとややこしいのが日本産のサクラマス。英語では“masu salmon”。サケ扱いなのかマス扱いなのかわかりません。
- ・しかもサクラマスは、もともとヤマメという川魚が海に下って大きくなった姿です。ヤマメの幼魚はニジマスとそっくりなので、まぎれもなく「マス」です。

こうした例を見れば、日本語と英語が全く対応していないことがわかります。英和辞典の作成者がsalmonとtroutをうまく訳していなかったのは仕方ありません。英語力の問題ではなく、魚類分類上の問題だからです。

なぜ対応しないのか。英語では、サケ科の

魚のうち、海に下って大きくなるものを“salmon”、川に残って小さいままのものを“trout”と呼ぶ傾向があります。しかし日本語では、サケ・マスの区別に統一した基準がなく、慣習的に呼ばれてきただけなのです。つまり、言語の違いが、私たちの色のイメージや分類の仕方を簡単に乱してしまうということです。

## 本質を見る目

ここまでずっと魚類の豆知識みたいな話になってしまったので、最後にチャペル講話らしい教訓につなげたいと思います。それは、私たちの認知は、言語や視覚のちょっとした影響で、すぐに左右されてしまうということです。

味覚のように「直接感じている」と思えることですら、色や名前のような先入観で勝手に混乱させられてしまいます。つまり私たちは、思っている以上に先入観から自由ではありません。だからこそ、偏見や思い込みによって、本質を見る目が曇らされる危険に、いつもさらされているのです。

信州サーモンの正体をニジマスだと言うと、「そんなこと知りたくなかった！寺沢は意地が悪い！」という反応をたまに頂きました。それに対し私は、「見た目や名前に惑わされず、本質を見ることが大事だと伝えただけです！」と反論します。自分でも無理のある反論だと思えますし、意地悪だというのは否定しませんが、みなさんもこの話を聞いたら、クリスマスディナーのサーモンの味がちょっと変わって感じられるかもしれません。

(社会学部准教授)

2025. 12. 11 (木)

## How to demonstrate kindness in this special season?

Vivian Bussinguer-Khavari

*And do not forget to do good and to share with others, for with such sacrifices God is pleased.*

(Hebrews 13:16)

### Introduction

When you think about Christmas, what do you think about? In Japan, most people probably picture couples out on a romantic date, a Christmas cake topped with fresh strawberries, gorgeous illuminations around town, and lots of chicken for dinner! In my personal cultural background, Christmas brings to mind: Jesus, Christianity, family time, love, and kindness.

In Japan, the New Year holiday is perhaps the most important time to spend with family. But for many foreigners, especially those from western cultures, Christmas is the most important holiday and the most difficult one to be away from loved ones.

When I first came to Japan, the Christmas season was very difficult. I felt lonely. I missed my family and friends. I was only a teenager. I was very far away from home. Friends from Taiwan, Korea, Malaysia, or even Australia, would go home during the holidays, but coming from Brazil and being a student, it was not easy nor cheap to simply pack my bags and go see my family just for a few days. I did not have enough time and I did not have enough money.

In those days, I noticed that the Japanese did not have the habit of inviting people over to their homes, so foreign students like myself often struggled with loneliness, especially during the holidays. I never expected anyone to invite me to spend the winter holidays with them, as I knew that the New Year celebration was a special time for the Japanese and they only spent it with their immediate family.

However, I never forget the winter in which my university classmate, Ayane, in-

vited me to spend three days in her hometown, Kagawa, with her family. It was such a special time. I learned so much about Japan and the Japanese culture through this experience. I was so thankful. And, I still am, even over 20 years later. Hers was truly an act of kindness. She saw that I was alone in Japan, and she invited me to spend time with her and her family, even though in her culture, that was a time reserved for the most intimate relatives only.

## Spreading Love and Kindness

As the Bible suggests in Hebrews 13:16, let us not forget to do good to others, for God is happy to see our efforts in doing good. As we enter the Christmas season, I would like to share a few ideas on how we can spread love and kindness to people around us, in our everyday lives. Kindness costs nothing for us to give, but it is worth so much and it changes everything! Below are ten ways in which we can spread love and kindness all around.

### 1. Greeting

This is the easiest way to show kindness in our daily lives. Someone can be so blessed and encouraged by a simple "Hello". Someone can be saved by our 「こんにちは」 so let us remember to always greet people, on a daily basis.

### 2. Smiling

This is another simple and free way to spread kindness. When you smile, there is no way you do not get a smile back. You will certainly brighten someone's day. And in return, you will be encouraged too.

### 3. Donating

We all have many material things that were useful for a season, but maybe the time has come for us to allow someone else to enjoy them. We can learn to let go of items that can serve others better than ourselves. Also, Japan, for example, has many natural disasters, so donating food, clothing, or supplies in times of need is a great way to practice kindness.

### 4. Sharing treats

This is something that I love to do. I like cooking and baking. On the weekends, I like to go on walks in my neighborhood. I often bake bread and while it is still hot, in the morning, I take it with me on my walk. The first person I see, I give the bread to them and wish them a great day. It's a great way to get to know my neighbors and make someone happy to receive a freshly baked

bread in the morning. You can use any of your many talents and interests to make someone feel loved and seen.

5. Helping

This is a natural way to show kindness, by seeing a need and helping out, offering your strengths and abilities. For example, my neighbor is 87 years old and she is getting weaker and weaker. My husband and I often offer to help her by taking her garbage or walking her dog. She is very thankful. You can also find a simple need within your circle of influence and step out to help.

6. Complimenting

Unfortunately, our society often lacks an appropriate amount of complimenting or encouraging. People tend to open their mouths to complain or communicate anger more than they do to share words of affirmation. A comment as simple as: "You look great today!" or "You play the piano so well!", for example, can bring joy to people around us.

7. Hosting

Inviting friends and neighbors to our home is a friendly gesture that opens so many doors. Interacting with others in such a personal space as our home, helps us open our hearts, which leads to better communication and a more intimate and honest relationship with one another. About two weeks ago, We invited 16 neighbors for dinner at our home. It was a wonderful time to get to know each other better and build stronger bonds.

8. Checking in

This means to get in touch with someone to check if they are doing alright. When you hear a classmate has influenza, for example, you can show that you care by sending them a message and checking if they are okay. Or, if you have not heard from a friend or relative in a while and you find yourself thinking about them, it is nice to pick up the phone and give them a call. This is a simple and natural way to show kindness to people around us.

9. Volunteering

Another way to demonstrate kindness is to offer your time, energy and skills to complete a work that is meaningful to you and your community. It does not have to be a big commitment; it can be something small like helping with a local festival or event.

10. Paying it forward

The final suggestion for practicing kindness is one that can guide us throughout our whole life, which is paying it forward. Simply said, if someone

does a kind act towards you, you can continue the cycle by doing a kind act towards someone else. In that way, kindness continues to spread and eventually multiplies all around us.

## Conclusion

Kindness is magical! When we are kind, we don't just help others; we transform ourselves. Studies show that kindness boosts our own happiness, reduces stress, and fights anxiety and depression. So, today I would like to encourage you to be the spark, to step out, to brighten someone's day. Our society can be better, one kind act at a time, and we can all be a part of creating a better world for generations to come!

(社会学部准教授)

## VI. 新年を迎えて

2026. 1. 7 (水)

## 新年の雪景色

Timothy O. Benedict

いちじくの木に花は咲かず、ぶどうの木は実をつけず、オリーブも不作に終わり、畑は実りをもたらさない。羊は全て囲いから絶え、牛舎には牛がいなくなる。それでも、私は主に会って喜び、わが救いの神に喜び踊る。神である主はわが力、私の足を雌鹿のようにし、高き所を歩ませてくださる。

(ハバクク書 3:17-19)

「帰省したいな・・・」

皆さん、おはようございます。今日は新年を迎えるというテーマで、この新しい年をどのような姿勢で迎えたら良いのかについて少しお話をしたいと思います。まず最初に、皆さんはこの年末年始はゆっくりできたでしょうか。それとも、仕事をしていましたでしょうか。私はというと、12月は本当に忙しい月でした。まず、クリスマスの行事がとにかくたくさんありました。また、教会の行事もあり、さらに家族のお祝い、クリスマスパーティーなども重なって、とにかく予定がぎっしりでした。また、四年生の卒業論文の仕上げの時期とも重なっていたので、正直に言うと、クリスマスを迎えた頃には、もう心も体もかなり疲れ切っている状態でした。なので、年末は家の片付けとか、ほったらかしの研究など、少しキャッチアップしながら、ゆっくりしたいなと思っていました。

ただ、そんな中でも、心の奥底では「実家

に帰省したいな」という思いがずっとありました。私はアメリカ人ですが、実は長野県で育ちました。両親は今もそこで暮らしています。ただ、実家までは車で約7時間かかります。なので、「行きたいけれど、無理かな」と思っていました。やっぱり年末は、家の掃除もあるし、残っている仕事や研究など、やりたいこと、やらなければならないことがたくさんありました。しかし、クリスマスを過ぎた頃、「やっぱり行こう」と思い直しました。そして念のために注文していたスタッドレスタイヤを慌てて車につけて、家族で長野県北部にある野尻湖まで向かいました。結果的には、帰省して本当に楽しい時間を家族と過ごすことができました。

実は、帰省したい理由はもう一つありました。それは、子どもたちに雪遊びをさせてあげたい、という思いです。私には子供が3人いますが、三年前にも一度、冬に家族で帰省したことがありましたが、そのとき下の子はまだ4歳で、本格的な雪遊びはできませ

んでした。今回は、そり遊びなど、私自身が子どもの頃に楽しんでいた雪遊びを、体験させてあげたいと思っていました。

## 雪の良いところ

今から少しだけ、雪の話をしたしたいと思います。雪国に住んだことがある方はわかると思いますが、私自身、久しぶりに雪国に戻って、「雪のいいところ」を改めて感じました。その中からいくつか紹介したいと思います。

一つ目は、荷物が運びやすい、ということです。 「え？」と思う方もいるかもしれませんが、私の実家は山の奥にあり、車を止められる場所から玄関まで、結構歩かなければなりません。しかも階段もあります。夏は、重たい荷物を運ぶのが本当に大変です。でも、雪があると、大きなそりを使って荷物を一気に家まで運ぶことができます。重たいものでも、雪の上では意外と軽く引っ張れます。

二つ目に、雪のいいところは、月の光を反射してくれることです。つまり、夜散歩しても懐中電灯がいらないんですね。地面が真っ白だと、月の光が反射して、本当に昼間のように明るくなります。夏は必ず懐中電灯が必要ですが、冬は月が出ていれば、全く必要ありません。

三つ目に、転んでも痛くないことです。深雪の中を歩いて転んでも、痛くないですし、相当なスピードのそりから落ちてても、楽しいだけです。

このように雪には良い面が色々ありますが、4つ目に、そして私が思う一番いいところは、どんな風景でも一瞬で美しく変えてくれることです。どんなに汚れた地面でも、どんなに古い家でも、どんなに不気味に見える

木でも、雪が降ると一瞬で景色が変わります。いつもは何とも思わない普通の道が、本当にきれいに輝きます。すべてが天国のように感じられる瞬間があります。

## 景色を変えるもの

ここまで雪のいいところの話をしてきましたが、なぜこの話をしたいかというと、新年を始めるにあたって、皆さんにもこの「雪の力」を経験してほしいと思ったからです。もちろん、ここで言っている雪とは、実際の雪のことではありません。この雪が表している「物事の見方」のことです。例えば今日の聖書箇所は、とても不思議な箇所です。この歌を書いた作者は、何も無い状態、何も希望がないような状況にあっても、それでも「主に会って喜ぶ」、と歌っています。なぜ、そんなことができるのでしょうか。この作者は畑に実りが全くないのにまるで違う景色を見ているようです。

この聖書箇所を読んで、気づかせるのは私たちが「何ができたか」ではなく、「それをどう見るか」ということです。つまり「成果」ではなく「態度」です。新年になると、私たちはよく何か成果を求めて目標を立てます。何かを達成する、何かを成し遂げる、私も、毎年何かしらの目標を立てようとしてきました。でも今年は、この聖書箇所を読んであえて具体的な目標を立てませんでした。なぜなら、全く実りのない年になっても、喜ぶことはできるからです。目標がないわけではありませんが、それ以上に、「自分の態度を変えたい」と思いました。難しい状況にいても、つまらない状況にいても、態度を変えることによって景色が変わるからです。

ただ、態度を変えることはそんな楽なことではありません。でも、最終的に態度を一番変えてくれるのは神様の言葉に耳を傾けることではないかと思っています。例えば、私は毎回チャペルアワーに参加していますが、この時間は本当に大好きです。なぜなら私はこのチャペルに入る時と、出る時にみる風景が変わることが多いからです。讃美歌を歌って、お祈りをして、人の話を聞く。とても短いシンプルなプログラムですが、その内容が美しい雪のように私の普段見ている景色をとても新鮮なものに変えてくれます。例えば今日の讃美歌 463 番の歌詞はとても良かったです。「わが行くみち」という讃美歌ですが、英語のタイトルは In some way or other です。歌詞では先が見えなくても神様は行くみちを守ってくれるという内容ですが、In some way or other というのは「なんとかなる」というニュアンスを持っていて、私たちは神様に人生を委ねたら、「なんとかなる」ことを覚えさせてくれます。今日の聖書箇所もそうですが、聖書の言葉やお祈りや、讃美歌の音色に心を傾けると、私たちのみる景色は変わっていきます。

### 成果にならない新年の抱負

では、これを踏まえて最後に私はこの1月にどのような成果にならない目標を立てれるかを考えたいと思います。その手がかりと

して、私の子供から聞いた今年の目標を紹介したいと思います。お正月、家族で集まり、美味しいご馳走を食べる前に、私は三人の子どもたちに「今年の目標は何?」と聞いてみました。まず、六年生の長女です。彼女は「特にない」と答えました。とても彼女らしい答えだと思いました。一つのことにとらわれず、いろいろなことに挑戦したい、そんな性格が表れているように感じました。私も、今年は娘と同じように、「特にない」ということにしようと思っています。

次に、四年生の長男です。彼に聞くと、「このテーブルにある料理を全部食べる」と答えました。目の前のご馳走が気になって仕方なかったのだと思います。ふざけた答えかもしれませんが、目の前のことに全力な、彼らしい答えでもありました。私自身も、「今、目の前にある恵みに目を向けること」の大切さを、改めて考えさせられました。最後に、一年生の次女です。彼女は、「毎日、笑顔でいたい」と答えてくれました。この言葉こそ、今日の聖書箇所が語っている態度ではないかと思います。どんなに辛い状況でも、視線を神様に向けると、私たちの普段の生活が新鮮な雪景色に変わり、悲しみも喜びの歌へと変わることができるのです。この2026年もぜひ皆さんにとって美しい1年となるようにお祈りしています。

(社会学部准教授・宣教師)

## **VII. 学年度末にあたって**

2026. 1. 8 (木)

## 余白の重要性

——学年度末にあたって——

島村恭則

今はちょうどレポートの締め切りや定期試験に追われて忙しい時期かと思います。しかし、それが終われば2月と3月には非常にまとまった時間が訪れます。予定をたくさん入れている人も多いでしょうが、今日は私が大学生だった頃を振り返りながら、「時間の使い方」について少しお話ししたいと思います。

### 「白いままの手帳」が持つ意味

手帳にどんどん予定が入ってくると、なんとなく充実しているような気がするものです。しかし、予定の入っていない「白い部分」がどれくらい残っているか。私は、この「余白」あるいは「余裕」の部分こそが、人生において非常に重要ではないかと考えています。

私が大学2年生だった1988年の2月、ある日のことです。当時、私は民俗学研究会というサークルに所属していました。民俗学というのは、全国を歩き回ってその土地の生活文化を研究する学問のことです。

その日、私は、研究会のあと、東横線の中目黒駅前にある居酒屋で、先輩のAさんたちと飲んでいました。そこでAさんから「島村くんさあ、いつもいろいろ理論的なこ

とをたくさん話しているけど、フィールドワークは全然してないよね」と言われたのです。

当時の私は、記号論や構造主義といった現代思想の議論をよくしていました。しかし、フィールドワークをしていなかったわけではない。民俗学をやっているのだから、けっこうあちこち歩いているんです。ですが、それはともかく、なんだか気分が悪いので、「だったら、Aさんが行ったことのない場所へ行ってやろう」と考えました。それで、翌朝、目が覚めた瞬間に「そうだ、沖縄へ行こう」と思いつきました。沖縄は、民俗学を研究する上での研究テーマの宝庫、聖地のような場所でした。

### 予定がないからこそ掴める「偶然」

今でこそ沖縄は家族旅行や修学旅行で身近な場所ですが、80年代はまだ今ほど気軽に行ける雰囲気ではありませんでした。ネットもありませんから、まずは旅行代理店（当時はJTBを『日本交通公社』と呼んでいたような時代です）やJALの支店へ足を運ぶが必要がありました。

当時、大学生だけが入れる会員制の「スカイメイト」という制度がありました。羽田空

港に行っても空席があれば半額で乗れるというものです。こうした「空席があれば乗る」という出たとこ勝負の時間の使い方も、大学生にしかできない特権です。結局、水曜日に先輩に言われて、土曜日にはもう初めての沖縄に立っていました。

その後、私は沖縄を研究対象とし、卒業論文でも現地に住み込むこととなります。今でも沖縄の研究を続けていることを考えると、あの時もし予定がぎっしり埋まっていたら、翌日に切符を買いに行く暇もなく、今の私はなかったかもしれません。「余白」があったからこそ、偶然の言葉をきっかけに即座に行動できたのです。

## 1 日ぼーっとすることも「充実」のうち

アルバイトもしていましたし、旅行の予定もありましたが、それでも当時は空白の部分が多かった。だからこそ、何かを思いついた時にすぐ動けたのだと思います。例えば、たまたま手に取った本をバラバラとめくり、2～3行読んで興味を惹かれたとします。余裕がなければ「後で読もう」と閉じざるを得ませんが、余白があればそのまま夜まで読み耽り、翌日も読み続けられます。こうした「白い時間」があるからこそ、深い体験が生まれるのです。

結果的に、私の春休みや夏休みはいつも予定で埋まってしまいました。しかしそれは、先に予定を詰め込んだ結果ではなく、1日中ぼーっと過ごすことも含めて、結果として埋まっていったものです。「あらかじめ埋めない」ことが、今振り返っても充実感に繋がっていた気がします。

## 「四ツ谷の喫茶店」と「ゆっくり歩くこと」

当時は今のようなインターンシップも少なく、3年生ともなると、大学生活はずっと夏休みのような感覚でした。週に2日しか大学に行かないような時間割を組んでいる人もいました。私は上智大学の文学部国文学科でしたが、1学年40人ほどの小さなクラスでした。当時はまだ四ツ谷のキャンパス周辺に学生が行くような喫茶店（閑学だったら、正門前のトップコーヒーみたいな喫茶店のことです）がちらほらありまして、1限が終わるとそこへ行き、そのまま昼ごはんを食べ、午後に授業がある人は出て行って、そしてまた戻ってくる。夕方になれば居酒屋へ行き、友達の家泊まってそのまま翌朝また大学へ行く、というような日もありました。何を喋っていたかは全く覚えていませんが、そんな「空白」だらけの時間が何よりも充実していました。

最近、本当に三十何年ぶりにふと思い出したことがあります。大学の門から図書館まで続く一直線の道を、わざと「1.5倍のゆっくりさ」で歩いていたことがありました。周りが1.5倍の速さで動いているように見えるほど、自分のペースを落として歩くのです。なぜそんなことをしていたのか自分でも変ですが、普通のスピードだと考えがまとまらない時に、意識的にゆっくり歩いたり、立ち止まったりして思考を整理していたのでしょう。

今の社会は、まるで高速道路を走っているような状態です。スピードを落とせば渋滞を招き、途中で降りることも難しい。しかし、道は高速道路だけではありません。脇道もあ

れば、農道や路地もあります。あさって私が訪れる奄美大島の人たちは、本当にゆっくりと歩いています。

「高速道路をまっしぐらに進まなければならない」という強迫観念を捨て、ときにはゆっくり歩き、ときには立ち止まる。そんな「余白」の時間を大切にしてほしいのです。

### 「失われた孤独」を取り戻すために

皆さんのなかにも、予定を完璧に埋めることで安心している人がいるかもしれません。あるいは、予定に追い立てられて、くたびれている人もいるかもしれません。そういう人については、私は少し心配しています。

一方、キャンパスをのんびり歩く大学生らしい姿も見受けられ、少し安心もしています。かつて関学のキャンパス（上ヶ原）は、

学生がゆったり過ごしている姿から「上ヶ原牧場」なんて呼ばれていたこともあります。そのような姿で暮らせるというのは大学時代にしか許されない貴重な時間の特権です。

最後に一冊、本を紹介します。谷川嘉浩さんの『スマホ時代の哲学』です。スマホで常に世界と繋がっている「常時接続」の時代において、いかにして「孤独」という大切な時間を取り戻すか、ということが書かれています。

この春休み、もし「余白」ができれば、ぜひ本屋へ足を運んでみてください。そして、あえて予定を決めない「白い時間」を、存分に楽しんでほしいと思います。良い春休みを。

(社会学部教授)

2025年度 チャペル講話集

---

2026年3月25日発行

発行 関西学院大学社会学部  
〒662-8501  
兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155  
TEL (0798) 54-6202

印刷 関西学院大学出版会

---



